川柳松

No. 661

六月号

日川協加盟

黒川紫香の孫娘 宝塚歌劇団(月組)を退団 歌謡界にデビュー

美代かほり

美しい雨

岩谷時子 作詞 / いずみたく 作曲

いいわよサヨナラ

岩谷時子 作詞/いずみたく 作曲



●お願い 有線放送にリクエストを!!

レコードは下記美代かほり後援会事務所に ご注文下さい。

定価 (サイン入りカバー付送料共) ¥1,000 〒665 宝塚市中筋2丁目7-12(中西方) TEL 0797-88-0456 川柳塔本社事務局でもお取次ぎ致します。

祝 白岩文衛氏句集 出会い」

U B E 1+ ば 出 会 10 0) 風 0 あ た た か

見 事 3 落 椿 武 蔵 0 墓 3

ま お Us 0 観 音 3 h は Ш 0 F

跏 思 惟 弥 革力 薩 D 7 調

4

儿

柳

栞

尾

塔六月

Ш

乍ら、豪 ない。その時もあとの六時間は一題も出が、現場の人達のことを思って考えられ かる時は、まず、 来なかった。そんな経験から、 そんな時こそ創作に没頭すればよいのだ る。イライラしても仕方がないのだから テレビの仕事で、 豪雪のため六時間遅れたことがあ 大阪から千歳まで二時間で着き 札幌の雪まつりに出

である。素材は他の人の作った詰将棋か

中で行うのだが、

やはり「素材」は必要

頭の

いった乗物の中で、盤駒を使わず、頭のその創作の現場は、汽車とか飛行機と

ら求める。その作品を見て、ここをこう

いう展開に変えれば如何だろうか…と目

考えをふくらませていくので

面白く思った。 に言いきかせているという。 とを思い出してはいけない』と自分自身 一寸僕の川柳創作と一脈相通じると、 『腹をたててはいけない。 不愉快なこ

乗物

を閉じて 目 この間、

ある。

を閉じて、

った。 勝ったり負けたりのチョボチョボ勝負だ 不二也さんとは、昔はよく指したもので 合わすと駒を並べている。ふあうすとの 君は二段とかいうことである。僕と顔を 段とか四段とか聞いている。塔社の酔々 「時の川柳」 の東洋樹さんは抜群で、三

誰方がどのくらい指されるか知らないが

僕のその一つに将棋がある。 下手の横好き」

という言葉がある。

を読んだ。十一歳で将棋を覚えて、伊藤 毎月五十題の詰将棋を新聞、 をするきっかけとなったという。九段は 看寿の詰将棋に出会ったことが棋界入り 内藤国雄九段の「目を閉じて 雑誌に出題 乗物の中で、目を閉じて、創作を行って現在の私にとって、最も楽しい時間は 物が現場に着かない時は話は違ってくる ならない。ところが予定の時間通りに乗 の時間が四時間でも五時間でも全然苦に いる時と言えそうだ。したがって、

1



川柳塔 月号 目 次 題字・中島生々庵/表紙・直原玉青

川柳塔

(同人吟)

ある便り

黒

JII

香 栞

西

尾

î

をして貰いましたが、

治療代も判らず少し多

若本多久志選

4 2

出来ました。

たですが体がさっぱりして昨夜やっと作句が めに用意して行きました。保険は効かなかっ 目を閉じて

と駄目でまた想を変えて見ましたが矢張り駄

か出来ず困りました。折角作っても後で見る

先生お元気ですか、次の句会の句がなかな

四月十四日

(水) くもり

目です。

ティ の川柳、 がらにでも読む事が出来ましたのに今は皆さ 貰ったものを聞いていますが、昔ですと寝な んのおかげで耳から楽しまさせて戴いて居り 昨年秋、 ア会員の方にお願いしてテープに入れて つくづく川柳は楽しいものだと思いま 俳句、 身障者の集いで北海道へ行った時 短歌の作品集が読めずボラン

りとしか見えないバス停の丸い標識が後の大 のバス停での写真を見ますと、いつもぼんや この間、 長男の嫁と孫が来た時写した近く

句評

1)

川竹松風

小島蘭幸

·西山

幸

阿部

柳太)

河 金

佑 秋

57 47

48

井

文

橘

高

薫

風

選

秀句鑑賞

水煙抄 同人吟 57年度二賞候補作品中

間発表.....

水煙抄 ■連載 ■川柳太平記 自選集

誹風柳多留廿六篇研究

六丁)

黒

11

紫香

選

44

30 28 26

(49)

久良岐の「川柳梗概」の価値

東

野

大

八

ある便り

黒

Ш

紫

香

2

見ても薄ぼんやりとしか写りません。それで

眼が不自由という事はつらいもので、

肩も凝ったので生れてはじめて、マッサージ

The late	早よ嫁にやらにゃ柘榴のごと裂けん	寝転べば畳一帖ふさぐのみ座右の句	**	編集後記	雅号ぶっちゃけばなし	各地柳壇(佳句地10選/板尾岳人選)	塩満敏句集「夫婦酒」出版記念句会	柳界展望	句集「夫婦酒」讃歌	初歩教室	「瓜」	一路集「甘 党」		力量の厚み	心温い句集	祝白岩文衛句集「出会い」の誕生
A	大		4	々	藤	:	:	į	玉	本	欄	北	堀	板	土	本
	鶴	路		・酔々・鬼遊・史好	井				置	田市		B#	江	尾	居	田恵二
36			10	遊	春	:	:		重	恵二	蘭	勝美	芳子	岳	耕	思一
1	喜	郎	XX.	史好	日				人	朗	選	選	選	人	花	朗
	由		*	:	i	į	į	:	1	;	:	:	:	:	:	÷
)	77	71	69	65	63	62	60	59	58	58	55	54	54

労働福祉会館へ行くのに乗ったバスを間違っかり嬉しくなりました。っかり嬉しくなりました。

実価権名を動へ行くのに乗ったハスを開送 、定中で下車し長い道程を歩きましたが、弱 、最中で下車し長い道程を歩きましたが、弱 、場合でする。

こんな便りを貰った。S子さんといえば老に入ってだんだん視力が衰え今では字も薄ばんやりとしか見えない中で川柳に取組んでぼんやりとしか見えない中で川柳に取組んではんやりとしか見えない中で川柳に取組んではいに書いて飾らない近況を送って来られる。

川柳誌或は句報を家の人に読んで貰うが、大きな字だとどうにか読めるので福祉会館へ行き拡大透写器で大きく写して貰って勉強をするという熱心さで、句会でも披講の後で選者に頼んで入選句の中から耳で聞き止めた句を黒板に書いて貰って作られた句の文字からを黒板に書いて貰って作られた句の文字から、川柳誌或は句報を家の人に読んで貰うが、大きな字だとどうにかいまして

柳誌を読みたくなっても読めないので家人を頼りにしているが、それも限度があり思うように行かないと嘆くS子さんも川柳をはじめてまだ僅かだが、苦しみを乗り越えての作めてまだ僅かだが、苦しみを乗り越えての作の態度は周囲の人々を感心させ、よい刺激剤になっている。



岸和田 高 橋 操 子

記念樹も大木となり句碑の苔 ぼんぼりに花をあずけて月の 城 (千亀利城まつり)

長繻絆の色でおしゃれをした積り 裁く身も解らなくなる世の乱れ 悲しみの極致私は誰でしょう

まい りを忘れて帰った花の寺

お

松原市 玉. 置 重

活け鯛で恩着せられた誕生日

酒

で胃を切られたらしい惜し

いノド 人

金ブーム入歯

一本ある

ばかり

11

ちょぼちょぼの夫婦2で割ることに慣 500円玉早速孫のターゲット 嘱託の身分で愛妻弁当で

ずし妻はよっぽどひまらしい

浜

本

義

美

Y 間 の生活 が聞 この国 からつ」 部化 1)

買

荒天続くテトラポットの影寂唐津まで来て贋物の「からつ 田に草を生やし土木で賃稼ぎ

が待ち切れず酌む花の下

五百円玉お前 もつ いに 小銭組 青森市

T.

藤

甲

兵を語るは敗軍の将同 くやしさを作り笑いの奥に見る

紫陽花のこころに雨 葉ざくらが働きすぎた目に青 にされて男は意地を見せ

尾市

高

杉

鬼

遊

飢え遠く青年の脚長くなる がふりやまぬ 10

若 本 志

43 選

トイレから戻ると社長の顔になるに、カーで果てる貧しい詩を綴りこの町で果てる貧しい詩を綴りまる聞いてやれる耳だけ開けておく思痴聞いてやれる耳だけ開けておく	黒い霧はらうと首が細くなる正直とお金どうやら気が合わぬ正直とお金どうやら気が合わぬ正直とお金どうやら気が合わぬ	無まるした明治 (本方) でいる (新年) をした明治 (本方) と (大) と	着直しがすって、 を直しがすって、 を直しがすって、 を直しがすって、 を直しがすって、	家なおす話へ枕うら返す。 兵庫県豆のなることをせかれる豆の花
中		江	西	遠
ЛП		П	森	Ш
滋			花	пј
雀		度	村	住
課長が替れば飲みに行くとこまで変るセールスの車中で桜を見て終るセールスの車中で桜を見て終るに紹年したように留年したように留年した。	子の嫁がおじいさんとは肯けぬ 野立てた割にお酒はこぼさない 正を感じるがお酒を悪く言う	本発はしてもテレビが捉える をの昔ぶたれて回る独楽ありき 自痴美の年頃となる哀れさよ にもかされたとこを開いたままで寝て がされたとこを開いたままで寝て	似たような夫婦に出逢う春の旅石切の坂のながさは苦にならぬ 鹿んでならないものにわが諸手 鹿圧計親と変らぬ血が流れ 鳥取県 みんなロボット待合室に腰をかけ	旅の夜を妻という身の置きどころ 大阪市 不況風パンの重みがのしかかる
	野	中	鈴	小、
	H	Щ	木	出
	素身郎	幸	村画	知日
	I)			

塔はるかなり歩いても歩いても	の丸を主役にすると風が巻く心の坂まで五欲追うてくる心の坂まで五欲追うてくる小の坂まで五欲追うてくる		った娘を思い	平のスターの被 一型之の亡母がい では友達だけと がいと ではなきなける。	執着よ見せまいしだれ桜見る 類廃の甘美さ女惹かれゆく 和廃の甘美さ女惹かれゆく 本当も嘘つく時も暗がりで 本当もないけど大地感じる娘
赤川	オ		谷	浦	元
苅菊	7 T		弘、		美
野	f		朗	婦美子	恵
±1	3.0	9	1/1	,	,,,,
春うらら外野フライを見失い格別市	はまる窓で制の無点などしに、 なまず女の自らを責め夫を責め うまず女の自らを責め夫を責め が気になる何を企む気	£ 1) =	わたくしこ勝たねばならぬ主義守る大欠伸骨も鳴ってる平和です人形へひとりぼっちを語り合い	語面には載らない母の子守歌 山重し父祖の血滲む樹で埋まる 花吹雪善人ばかりの貌になる 藤の花娘は母となり遠く住む はなる	赤電話あなたの秘密知ってます グラス掌に好きで飲んでるわけでない グラス掌に好きで飲んでるわけでない 増る人知ってコロコロ毛糸玉 増るでいたであればでない
名	}	西		水	林
ti	H	村		粉	は
易	ė.	早		千	7
女	子	苗		翁	絵

雨晚 1 することはしました俗名返上し 花 夢見てる 振り袖 ルイ王朝風 孰 まだ呆けず家族麻雀老夫妻 E. 葉 新幹線延びて出張いやがられ 花活けてひととき亡夫と二人きり 永遠 封 年齢を訊けば陛下と同じどす 君も僕も三行ですむ死亡記事 3 に散る桜の花見又風情 体旗 人軍 0 の山 年 桜 入社員ダークスーツで燃え始め 切をわくわく待ったのも昔 I 東の で生 1 0 0 37 メでばっ 恋がめつさを通り越 強く憎まれ 誓い ベンチは老い 東北弁でがなり立て 1 へ母の二 25 し飲 H コー は の喫茶で読 H へ指輪 人生 僕 めりゃ良し自 スター 0 たばったと診察 0 1 0 ても人気 舞踏まぬよう ぬけやすい フィ 0 の指定席 に乗せて本音を吐かそうか む漫画 ナー 一適の身 大阪市 出雲市 神 F 市 市 北 仲 原 福 本 どんたく 用券 英. 独 美 仙 子 握りめ 終止 鬱憤 埴輪の目くぐった風が街へ吹く 雪崩ニュー 父短気息子人より気が長 演 満 民謡 さくらさくらベンチで死んだ真似しま 二人共良い 往 丸裸のリンゴで何を考える \mathbf{III} 血圧が好きな観 ガクランで祖 冷たさを首に感じた合理 歌流 腹 婚 年の二枚目仏壇コマー 駄もよし潤滑油 に春 のはがき一枚黒 の男五月を呆うけてる 符をきれい の雑誌泥棒猫に投げ 1 成 0 風塔 H 7 しあんまり空が青 れて花は葉桜 眼の上 の夕べ 刺ひとつで朝が済み 人なの ス捨てた故郷も雪国で 0) 尖から 父と孫との口 を酔 につけた花吹雪 劇 の瘤がな に嫁姑 断 になるなれば 10 らせ いし 吹い 枠 シャ れる 主義 V 42 Vi てくる 喧 0 7 嘩 ル 高槻 大阪市 倉吉市 林 市 iti 岩 H 渡 临 辺 \mathbb{H} 美 あき子 苦 3.

句

2

代

引き出 父の ライ 若 すれ違う女 青信号一年生の列続く もう一人の私を探 幸 \pm 順 苗 庭 気安さが言うてはならぬことに触 泣きどころちゃんと押さえてある強気 花 真 終章を飾るロマンが胸 行 過去ばかり浮かび出てくる沈丁 様の 一様の心 泊を許 せへ向う切符を共に買 い気で居ても写真は嘘 0 実 i隹 番 木 0 花 靴傷つくことの m 市 種やがてこの子も歩き出 の愛はときどき奇 15 かい 響 留守に原爆落される 狂 II しをなんべんも抜く物忘れで居ても写真は嘘言わぬ ルに水あけられたマイペ 蜜 されて発つ か 0 柑 80 で不急品 7 せあの世までを契り た香煙 を買って梅も欲し 無難 がす海 目に を買う 春の香を放 東 多かりき に住む しみる へくる 跡 0 生 朝 10 1 む す 大阪市 大阪市 ース 花 11 金 1 島 野 # 文 克 3/ 蘭 生 秋 枝 花束 朝 定退 騙され 無為 女ら 昨 さつつ 凡人の汗は 生きてゆくことは働くことと知る 鼻っぱしらの強さ女にある家系 金の要る話になって後退 返事出しそびれてペンが重くなる 春なれや双の乳房をもちあ 薄情な男を忘れ -天を仰 本の 金 音 緑 七時受身に強い靴を履く H 休 今日 くばらんに話 を貰 0 の意味には深い謎がある 0 に課長代理の椅子が待ち 0 九 功 樹の俺は一葉なり 日 まいと自 10 一々新聞 女が食 妻に 輪 明 い髭剃る昼 いで星を見る広場 徳門前 水煙 H は思 カラットで光る も七 ようとせ ばかりたま 虐の石を積みあげる 田 着くなり る桜 痴 栄 時 せる友に金がない の風 の朝を出 がふえるだけ 餅 け 1) 3 h VD 宝塚市 八尾市 1 Th 村 香 傍 那 E 島 111 須 酔 静 鎮 \mathbb{H} 鶴

馬

彦

17

子.

和歌山市	桜観る人に踏まれる草の花	同行に歩幅合わせて遍路笠	お線香ゆれて優しい仏さま	ぶっちゃけた話の出来る友がいる	痴言わぬ言わぬ思		不況下に気乗りのしない労働歌	数珠軽くもんでこの世の裏表	灰皿のピースが嘆く右派と左派	ユーモアが淡々と出る父の酒	新聞の美談に酔った朝の靴	富田林市	平均台おんなの小股切れあがり		兎も角も七十年という鼓動	手の届く距離まで耐えてるシャボン玉	やけくそで叩かれドラム自棄で鳴り	島根県	熱きもの胸にたたえて坂のぼる	さあ五月ヒールをすこし高くして	母の日も紅一本を買い足して	迷いふと桜が散ってゆくように	サクラ・サクラ テレビの中の行楽よ	八尾市
野						本						中						小、						高
村						間						村						砂						橋
太茂						満津												É						夕
津						子						優						汀						花
無にかえる京梵鐘の息使い	堺市	の支える孤	廃品のような私の影法師	ゆっくり話そうと説教の顔である	ひとり言私が私を叱る時	広目屋は喪中も街に出て踊り	倉敷市	厳しくと言うから叱ればねじこまれ	一枚の辞令で木の葉のように飛ぶ	子どもだけ止って待った赤信号	先生と親の目またも行き違い	わが子しか見えない親に困り果て	大阪市	改築 増設物皆すべてボクの葬	ポックリ詣りまだ死にそうな顔でなし	枝打てば木霊の歓喜腕伝う	鳥ケモノひねもす会わず山仕事	松の無いニッポン国をおもてみる	兵庫県	かくれんぼ老いの僻みを慰める	童話生まれて樟の若葉が散ってくる	青葉若葉の匂いに酔うて知る命	こともあろうに豪雨の中で久しぶり	慰めて賞めて叱って疎まれて
	高						稲						ग्रा						河					
	橋						田						井						原、					
	千万子						575						庸						みの					
	J.						作						佑						る					

職けばかすかに揺れるイヤリング 額の文字初心一貫叱咤する 老夫婦欠伸うつして笑わない 保証期限きれて時計が狂いだし 中吉のみくじは迷い深くする 大阪市 俳優も歌手も混じってドラマでき 宣伝の徒歩何分は走りづめ	無見か恋うほど住み易くない祖国 川の字で嫁入り前の四夜五夜 月ではもう呼び捨てで載せている り刊はもう呼び捨てで載せている 東土へのみやげにします鐘乱打 原土へのみやげにします鐘乱打	潮干狩少し動いて自己顕示 南会はよそう思い出こわすまい 恋愛が芽ばえて母の愛がぼけ 善人の怒り常識通じない 高知県 生れても死んでもお酒つきまとい ちちははの言う通りなる都会の灯 塩つぼの塩がへらない老夫婦 女です眼鏡はいやな物の中 女びとり住み盆栽のそこかしこ
神	森岩	
H	田 井	
秀	カ ズ エ 棒	Ξ
峰	工棒	吉
独り身の気安さ母の癇にふれ 独り身の気安さ母の癇にふれ 火元から火消しにまわる会議中 戦安の窓教養が邪魔をする 米子市 中道が右よりになる舞台裏 反省の右手聖書を離さない	指先の出る手袋で釣に行く ゴム紐のようには時間伸ばされず 片隅に濡れたまま置く古い傘 ちょぼちょぼの中から選び満足す 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、	ボ三月たたぬに新 スコミの悪いとこ スコミの悪いとこ ばろげに娘が知っ はろげに娘が知っ にかりと女誘いの がこぼれ
F	本	本
4.6		
H	忠	真 登 美 也

賃上げの抑制だけの行革か 小次郎が武蔵に勝って花まつり 小次郎が武蔵に勝った甲子園 和泉市	箭	何くそと思えど五十路ままならず 出刃買いに行けばジロジロ見られたり 炭坑を知らない人が炭坑節 炭坑を知らない人が炭坑節	ある朝の鏡に弾む風五月 変の撃はそよ風の中にみだれ 変の撃はそよ風の中にみだれ 変ので木魚の音を聞く	マネキンの誘い財布がうなずかぬ老いせまる母へ同居の荷をまとめ
岡	清	野	藤	
井	水	呂	村	
やす	健	鵜	4	
お	司	汀	女	
前向きの姿勢だけなら僕もする半分はママが子供にあまえてる半分はママが子供にあまえてる当はさてこれからと喜寿目指す	豊かさの底の浅さを知る窓辺 野仏の笑いの中にある祈り 同じ顔なのに母の夜の顔昼の顔 骨つと言う言葉へ回す走馬灯	富田林市福島が武器です主婦の立ち話現役を退いて世間に趣味で出る今ならば言えることだが妻問わず今ならば言えることだが妻問わず	一枚の切手に愛が運ばれる 自い画布若さはなにもためらわぬ 自い画布若さはなにもためらわぬ 見穀に非情な貌を見せる橅の中 と対して檻の中	ハイエナのような国と手つなげるか
	草	和	仁	時
	深	H	部	広
	西华	維久	[1]	
		/\		

升

郎

路

無になる羽ばたきまでの仮姿 はい知恵へ昭和ひとけた正座する 腹立てず三百六十五分の一 ないなる羽ばたきまでの仮姿 来子市	 	院組んでくるアベックへ道ゆずる モーニングコーヒーですむ一人者 を加いごと並べて見ても男と女	税引きの手取りは書かぬ募集記事 税引きの手取りは書かぬ募集記事 を大樹は語らない を大樹は語らない ・ ※子市	門前の露店も鹿も去に仕度 正義感あるけど銭がついて来ず 麻雀にパチンコ遊びに全自動 工場のある駅入間くさい朝
管	þ	稻	7]	村
井	Į.	葉	迅	上
と ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま	t	冬	旌	春
子	E	葉	17	E
平下なま好で手が今日も合う 等をに風邪ひかすな」きびしい父である 準分は煽てにのるのも年の功 とかは煽てにのるのも年の功 といっしか五十五シャボン玉に似てきたり である	至して記さればいる。 新緑よ物皆みどりに染まりそう 男なら慰めよりも励ましを	花言葉信じて花の種子を蒔く	百病が一つの生命遠まきに低人さまだから話せる事もあるの涙別れもまた涙が出てしまう	正言市 妹 尾 春 江 及省の兆しとつとつしゃべり出し 反省の兆しとつとつしゃべり出し 最婚の旅で転居の跡を訪い ま婚の旅で転居の跡を訪い

飛鳥仏の半眼れんげの野を見てる古代史の化石飛鳥の石仏上の野はマスコミかも知れぬ本当の罪はマスコミかも知れぬ本当の罪はマスコミかも知れぬ	向うにちちははの声がする出の亡父は笑顔でばかりいる出の亡父は笑顔でばかりいる出の亡父は笑顔でばかりいる	東縮を叫んで咢堂立っている 事縮を叫んで咢堂立っている サの敵はやっぱり女です 場の桜が奇麗なうさぎ小屋 堺 市 藤 井 一二三二	日記帖だけが本心知っている 松江市 柳 楽 鶴 上 本り返る過去に生死の幾山河 松江市 柳 楽 鶴 上 本り返る過去に生死の幾山河 松江市 柳 楽 鶴 上 日記帖だけが本心知っている	生きてたらの想いの中の通り抜け
	的	三	丸	
トラブルをおさめる酒を買っておく負け犬が再起の旗を染め替える 質識ないいのちへ鼓動確かなり 恋識ないいのちへ鼓動確かなり	まで がけ足で逃げる春など追いはせぬ 体せがめし茶碗にある夫婦 体である はなの はなの はなの はなの はなの はなの はなの はなの	桜井市 大根おろしが好きな男で頼りない 大根おろしが好きな男で頼りない 大根おろしが好きな男で頼りない	春や春猫も私も浮かれ出し 業の花や故郷へ続く遍路笠 対のすくすく伸びて節をつけ 大田路まだ捨てがたき見栄を持ち	大阪市
鍛	小	岩	鈴 森小学校卒業	柳
原	林	本	鈴 木 鳥取砂丘にて)	原
千	由 多 香	雀踊	節	静
里	育	子	子	否

師の影を踏んで覚えた舞扇	新宮市	前世の縁とたがいに諦める	はすかいに眺めるくせが出た見合い	捨てられた村思い出すダムに佇ち	御堂筋ジープ軍歌を拡大し	雨あがりどこかで傘を置き忘れ	神戸市	転んでも石の所為だとする世相	決心がつき大空の広さ知る	我が初心貫きたいと老いに鞭	妻の影老いの猫背を写し出し	幾とせぞ妻の句歴に辞書も老い	岸和田市	七人の敵あり今日もひげを剃る	殉死も一揆も知って大樹かな	男っぽく女っぽく地球儀ゆれている	マイルドセブン又一本の罪を持ち	生かされて昨日に続く今日があり	守口市	洗濯機も息切れしたのかストライキ	お祝いが素直に言える晴れた朝	ひくくした踵でローカル線の春を行く	背信の心は持たぬ針葉樹	いたずらなチャイムが起す日曜日
	大						中						狭						水			,		
	矢						村						間						原					
	+						P						希						静					
	郎						きを						希久志						步					
おしゃべりの佳境はしのび声となり	心そこに無い相槌を打っている	羽曳野市	友達でいましょう冷えた茶をすする	法話きく端から煩悩首擡げ	極楽の道へ望みをつなぐ鉦	逆縁の供華にたっぷり黄水仙	片耳の埴輪が聴いてる自衛論	鳥取県	執念の絵筆五彩へかける道	あの時の嘘を好意と想い出す	握る手が温い再起のめぐり逢い	脇道も人生ゆっくり歩こうか	雨を聞くワイパー動く応接間	米子市	祝われて半分さびしい喜寿の膳	試練の節あって素直に伸びる竹	それぞれのリズムで生きて日々新た	孫の名へ形見の一字生きている	吉日の疲れほのぼの母の床	和歌山市	薬石の効とはいやな選手権	白旗が一番安い防衛費	その時はその時近くに良い他人	筆まめな娘等に年代ある文字
		榎						林						林						内				
		本																		芝				
		吐						活路						瑞						登志				

杖

来

枝

証人台へ神を呼びたくなる無実合格の子と度を過ごす花見酒矢面に立つ一徹を愛すべし		あかね霊城ほろ酔いの色に染め	山の幸摘んで夕餉の膳楽し	妻よりも母でいる日が多くなる	PLの人文字優勝戦飾る	親と子の対話にたてまえなどいらぬ	岸和田市	隠し子は無いが迷っているこころ	大切な時間が貯まる日記帳	回り椅子に座るとだんだん気が変る	古塔から次代に残す謎もらう	よく笑う釣られて笑う落し穴	京都市	遭難へ樹氷冷たく陽に映える	問題をかかえ鉄路に錆がつき	停年という節それからの日銭進う	猫柳里の噂を聞いている	駅頭で軍歌うたった古日記	松江市	進学へ蛙の父が断下す	背伸びした始末は妻へ手を合わせ	聞き上手痛いとこにも一寸触れ
	安						島						Ш						恒			
	安平次						崎						本						松			
	51.	9					富						規不						叮			
	道						富志子						小風						紅			
入歯もう私の分身血が通い木蓮の花の香りへ振返り遠い子の幸せ祈る茜雲	影の句碑	岸和田市	花冷之の孤独の道はまだ続く	満点の人に欠けてるものがあり	咲き乍ら散らねばならぬ日を数え	嘘拭う手で念仏を抱いている	ふところ手にぎりこぶしが炎えてくる	島根県	受験子をかかえて遠い春を待ち	十円を上手にしゃべる赤電話	見据えてるように隣りの鬼瓦	趣味の句を練って急かない待ち時間	停退の気ままへ役が回って来	米子市	いつの間にまあるくなった妻の背よ	やっと春六十路の妻の習いごと	野仏と目が合い放尿向きかえる	さりげない演技もみせて嫁の出来	ビル天にてっぺんで呑むビール	竹原市	紳士録に載ると気になる氏素性	何事も運命と耐える夫婦箸
		古						松						桑						Щ		
		野						本						原						内		
		U						文						伊						静		

都

水

一人だけ笑わぬ人が隅にいる 大道他人のなぐさめなどいらぬ 大道他人のなぐさめなどいらぬ 大道他人のなぐさめなどいらぬ 大道地人のなぐさめなどいらぬ	言い合った気まずさもなくお茶を注ぎ 手間かけた味を嫁いだ娘も覚え 或る程度鏡は妥協してくれる 或る程度鏡は妥協してくれる	ひとことを頼りにしあう差し向い 横向いて口惜しいときの顔かくす 育減って独りになったのに気づく 音減って独りになったのに気づく	春や春へそくりまでが浮かれ出る子をだしに一泊二日で息を抜く度立ててしみじみ孤独かみしめる花ばさみ非情になってゆくわたし花ばさみ非情になってゆくわたし	無理矢理に老人にする書類来る
嘉	堀	堀	西	
数	江.	江	出	
兆 代 賀	芳	IE.	楓	
门侧具	子	朗	楽	
電託の椅子ではどうかと使い捨て ではい分がある負け犬のコップ酒 主役に言える不満は酒が聞き 上役に言える不満は酒が聞き	上がる予告雀の声が澄む福寺訪えば新茶に出会う幸福寺訪えば新茶に出会う幸福がる予告雀の声が澄む	世話をする約束させて飼う小鳥 問光に春の小川の私語を聞く 思いやる心嬉しく嫁姑 思いやる心嬉しく嫁姑	真っ白い壁に怯えている邪念 エンゲージリングやがて轡となる掟 老骨もちょっと伸びたと思う春 老骨もちょっと伸びたと思う春	和歌山市
錦	藤	此	清	若
稻	田	H	野	宫
文	軒	英工	3	武
子	太楼	英 壬 子	う	雄

ひと言が多くて寒い水枕 日本国憲法にある姦通罪 日本国憲法にある姦通罪 音中の味を知らない仏壇屋 カーヒーの味を知らない仏壇屋	心を生き甲斐にして心を生き甲斐にして	つまずいた石に反省促され 米子市 雑二家の後に第しく旅情の灯が揺れる	夕陽がせつなくて 連れの旅に立つ 連れの旅に立つ	要の糸切って未練をもう追わず をいきり伸びない手足旅をぬぐ 日島の帰る眼に逢う春の塔 自島の帰る眼に逢う春の塔
本	尾	加貝		H
	岳	美		
久 仁 於	人	世		と し 江
りうれしそうです若い母 ちっぽけな悩み捨てろと富士の山 ちっぽけな悩み捨てろと富士の山 がれやれと帰って来たのに又出掛け	味一すじのれんの重さここにあり、喉鏡う花に浮かれた昼の月、球根を植えて夢みる花畑	自画像を描き替えたくて髪を切る 泣かされた記憶もいつかいとおしむ 歩道橋から寒い景色を眺めてる	年で知ったは間の無い朝便	従六位を地下で笑っている恩師 地の端の月は斜めに転げそう 山の端の月は斜めに転げそう 唐津市
大 植		楠	西	木
道山		原	Ш	塚
		2018	III	
美 武 工		秀	Щ	素

OBのわしがやらねば誰がやる 動、鍬と農具に年輪生きていた 切らう仕事虫	放き割る話に酒が多すぎる 奥歯まで出して笑える浮草で のかなし	ろばん片手 き出せば桜	直さを自動ドア の昔心許した老 里の顔ありあり	張りつめた寡婦の姿の美しい 対称に多彩な涙落ちている 夕焼けの詩は別れも愛も抱く 四ん月の風は優しい子守唄 倉敷市
森	玉	天	井	藤
井	弘、	正	上	井
菁	半休	千	喜	春
居	門	梢	西华	日
左遷地へ覚悟と別な重い足験立つ子へ曲りなりにも一揃い巣立つ子へ曲りなりにも一揃いまったらと釘さされ	花ぐもり残る日時を惜しむ老い雑草も花壇の隅で咲いて散りすれ違う女の背なに女の目	無理すなと月給袋に書いてある 無理すなと月給袋に書いてある 無理すなと月給袋に書いてある	抽出しで一遍の手記風化する がイヤルへ指は掟を越えている がのまでも感情線に棲むあなた	長女志望高入学(二句) 参願のセーラー服が良く似合い を願のセーラー服が良く似合い を願のセーラー服が良く似合い
石		垂	横	松
垣		井	地	原
花		千 寿 子	雅	寿
子		/ 4	風	子

老妻と裏町行けばロマンめき	一と筋の涙反省嘘は無い	文化とは人真ん中を歩かせず	鳥取県	大輪のぼたんが寡婦の庭で咲き	鳩の糞問題にしている平和	胃の中で堪忍袋場所をとり	ひとりっ子塗り絵にさみしい彩を選る	松江市	シグナルの無い人生で迷ってる	夕焼けが西方浄土を信じさせ	目覚ましの電池を変える旅の前	桜散る風よ静かに吹いてくれ	東大阪市	棟梁の頑固は風に耐えている	頑固者小さな義理も欠かさない	刀掛け頑固に床の間占拠する	納豆が好きな父にはげまされ	東大阪市	那智黒の硯うれしい旅土産	露天風呂女体をのぞく岩つつじ	勝浦の旅	黄金のみかんが招く南紀道	後援会ツアー選挙がにおい出す	寝屋川市
			金川					舟木					竹中					斉亦						宮口
			清満															藤一						尾
			啊 春					与根					綾珠					三十四						あいき
出世した後輩幾度弔辞読む	CMの力士は喘ぐ声でなし	ロマンの字場末の映画館が奪り	町田市 竹 内 紫 錆	見舞客帰り西日が暑くなる	口ついてナツメロが出る霧の宿	おお神よ悪の栄える験しあり	秀才のあとを次点のまま終り	岡山市 時 末 一 灯	人生の一服余生早くなる	春霞すみ絵の中の野良仕事	春よ春明るいニュース遠く聞く	一つ一つ悪夢を消してゆく余生	島根県藤井明朗	ゆっくりと歩けば風の声花の私語	摘んできた花と痛みを分ち合う	父祖の地のビルの谷間で農に生き	八重咲の花と女は饒舌で	和歌山市 浦 野 和 子	満願の明日へ歩幅のある限り	一丁目二丁目ここも花の留守	そぞろ歩き天の音楽流れくる		岡山市 川 端 柳 子	蝶二つ戯れ合って春謳歌

日ノ丸の真ん中愛国心が燃え 大物の名刺小物がちらつかせ 柔肌に触れると狙う矢が外れ 反省をするにも役所暇が要り 原の艶八十路も二年目いける口 春浅く略礼服で思わぬ計	(注診を頼めばむなしい留守電話 は診を頼めばむなしい留守電話 を頼めばむなしい留守電話 を知ってる夫は沈黙す	遮断機の意地悪とたんに降りてくる 遮断機の意地悪とたんに降りてくる っないとおじいちゃん	職されてあげる女房の笑みに会い 職されてあげる女房の笑みに会い なだへ妻妻なりの地図を画く	悠々自適次回の講話にもそなえ
市	両	児	原	辻
場]1]	島	さ	
没食子	洋	与 呂 志	4	文
子	マ	志	子	平
家柄を言うてオールドミスでおり を事論もうキノコ雲忘れたか 使い捨てに似て定年のあわれなり 使い捨てに似て定年のあわれなり 大生の味が出て来た五十坂 人生の味が出て来た五十坂	道を聞く振りから家風を尋ねられ 一言が多くて署名簿断わられ 一言が多くて署名簿断わられ	ピカソの絵歩いてくるよ初夏の街油さえさせば働き蜂になるロマンには遠く夫婦で京の坂	原の凝る話も酒が融いてくれ 前の早い川にきれいな別れあり 瀬の早い川にきれいな別れあり	恍惚になりゆく老妻の我も寂し出雲市
北	原	岩	神夏	「泉」
野子	田	道	磯	Ш
久	明	博	道	多四

春

友

子

等のは、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、	用き給え地球は君中心に回らない 関き給え地球は君中心に回らない 両替屋の残る羽曳野ペダル踏む 羽曳野に伊勢吉野への道しるべ 平田市	大根の白贈られる垣根越し 大根の白贈られる垣根越し	賞乏に強い男で頼られる 賞乏に強い男で頼られる 関皮も不満硬貨でふくれては	逢って来た余韻夫の顔で消え
小	久	佐	樫	野
中 香	家	野	谷	呂
里	代仕	白	寿	右
風	男	水	馬	近
かは父が許した酒を飲み 年は結局夫婦で又暮し いるお賽銭 が下した酒を今日もの いかり られては困る日記を今日もの いっては困る日記を今日もの いったがン肥満もヤセも同じい	に は は は に な に が何度 も 利殖の本を読む で な し が何度 も 利殖の本を読む で な し が何度 も 利殖の本を読む で な し が の は の が の に の が の に の が の に 。 に の に 。 。 に 。 に 。 に 。 に 。 に 。 に 。 に 。 に 。 に 。 。 。	にあすありコッにあすありコッにあずありコッ	京都市 百貨店で老いても懐し雛を見る がまないた児から大卒のはがき来る よく泣いた児から大卒のはがき来る	かあさんの吐息春の嵐になるだろう
付け、三重県		177		
果川	藤	Щ	Ш	福
県			山本	福島
原川	藤	Ш		

食べ残す犬にも有った好き嫌い	不況風すぐ大砲を打ちたがり	ふと過去にとじこもりたくなる空しい	大阪市	なるようになる人生をつっ走る	すがりつく星はきれいな嘘に逢う	忘れたいことばっかりのにがい酒	しあわせの星はプランの外に住み	大阪市	子や孫で前途に虹を見る定退	溜息をもち帰るまい縄のれん	味方にはドン底共に耐えた友	敵味方あって人生又楽し	東大阪市	わざわざの墓参へつめたい故郷の貌	嘘の涙知ってて男のめりこむ	曲説が通る世論へ貝になる	都市砂漠風のかわいた声を聞く	米子市	胎動を聞く倖せな耳がある	聞くだけは聞いて反旗を考える	逆転を信じ校歌の声がかれ	ダルマの目入れる大きな筆を買う	鳥取市	学歴へ一歩踏み出すランドセル
		日	藤					津					奥					政					森	
			田					守					Щ					岡					田	
			頂留子					柳伸					弥山人					日枝子					熊生	
ライバルを祝う言葉を選っている	キャンドルが二人の門出祝う宴	東大阪市	金でかた付けてきびしい春の床	曲り角に来て野良猫の一呼吸	金で買う幸せ真赤な花が咲き	細長いみみずに夢を聞いて見る	玉野市	遠みちへ見え隠れして青い鳥	電話口まだまだ続く孫のうた	伸びをして星のウインク受けとめる	花言葉私の都合でつけ替える	和歌山市	鯨尺の節々へ明治生きている	四角な竹は四角な節を持つ	盲判押すには大き過ぎる椅子	ともかくもめでたし改題二百号	改題二百号記念大会に参加して(一句)	京都市	善意だけ信じて歩く白い杖	背伸びしてみたい地蔵に春の風	昇華した涙を包んでいる笑顔	追求の手に打ち込んだ五寸釘	海南市	一人言いわねば言葉忘れそう
		崎					小、					坂						松					#	
		Ш					谷					П						Ш					尾	
		美					仙					公						杜:					緑	
		子					Ш					子						的					楼	

ち 宝 英霊 巣立 亡 残され 御 眼 か 台 虚 子 突張って見ても所詮どんぐり ゆとり持つ歩幅は大地をしかとふ 娘むこ息子と違う味 嫁 D よっ 理 万円 脱 妻の忌に今日 4 くじ下一桁から調べ たくなに持論通して孤独なり をとじて今日 所 0 解を願う政治が多すぎる n 荷 などなか 女房の愚痴の捨てどころ 感夫婦茶碗 へ七つボタン つ子が夫婦のきずな呼び戻 娘の慶び淋しさと背な合せ と抜 て精 クの 0 0 の辛さをペ 重 出 さを 灯 けた人と話 10 た広がり 0 0 かい ぱい が重くなり 知っ た父母の墓を訪 霊 のドラマを消してゆく がロ 1 日は酒を断 界 ジに の嫁 をも がを近 た手 0 せば .7 中 して五枚 7 仕度 内 0 づ 居る 気が休む 調 1+ 職 0 3 仙台市 島根県 浜田 出雲市 松江市 う む 市 JII 佐 吉 竹 木 17 村 村 出 内 木 は きみえ 映 寿 C 80 輝 裕 美 善玉の意 もう 労働 他所ゆ 孰 白木蓮散らした嵐 核持ってなお反核と叫 ソ連侵攻あれから残 国鉄を倒 受話器から予想どおりの みの 裏切りがない 狙 だるまさん今度 真 落 反 確 わ 年. 省と懺 赤な嘘を少し薄 H 実 散 入った挨拶状 貴 虫があなたまかせの風 れる椅子悠然と腰 0 る涎に 真 ったそうかと花 族だけの春 きを着ても小 子 今日を生きれ つ、只中 E せば昭和維 感 悔 女に 従わ 0 とは 年を感じる 中 にい か るら片 1 明 胸 闘 言えぬ へ憎悪棄て 棒 H 8 る 返 あ てく ば明 0 留孤児の 新 銭 落 から H をかけ 鬼 べるか なり 入れ重 事 待 ほくさ 0 書 嘘を聞 自 自類 11 日 H 春 ま る妻 にゆ まで 0) から 久 風 あ L Vi 京都市 羽咋 否川県 12 いる 一般県 3 Ti Ti # 都 F 宅 倉 崎 柳 求 3 本 秋 Ti.

法

芽

女

郎

葬式に似合うお面を付けてゆく葬式に似合うお面を付けてゆくりがすでもテレビと同じニュース言いと同じニュース言いの声をきくを許して本屋稼いでるのみ下だし	ででであるです。 第五期目の選挙戦を終えて 第五期目の選挙戦を終えて 第五期目の選挙戦を終えて	お素値に言えずれなえきれいには見なるとおすそわ	こので が 近 に は か か き ここ か が ま だ 浅 き されること 魂 の 糧	妥よ)芽立ちが丹き母虫) 大東市 土 岐 トク子渋滞のペンを吐息で詫を書き 大東市 土 岐 トク子 関き上手愚痴言いたいだけ言わせ
スマートなからだスマートに飛ぶツバメ 特の手をかたく握って交叉点 島根県 大 森 孝 華 孫の手をかたく握って交叉点	四海皆萌えんとするを春に臥す 空蟬となれぬ種火が燃えている 空蟬となれぬ種火が燃えている き人が多くて閑な駐在所	靴べらの如くに まだ磨くつもり まだ磨くつもり	開店に女汁粉を二三杯を動が始まり団地桜散る を動が始まり団地桜散る を手放さず オーカー 第 星	ロボットはねだりなどせぬストもせぬ下心あるから異性に気がとがめ慣らされてなるかと味に文句言う

無為無策原稿用紙は○とてん 何もない俺だが自伝らしい物を書き 唐津市	育児書に無い泣き声で泣く愛児情ち上げられて金の要る役値切り上手な妻へ脱帽岡山県	パイプカットしてから女に縁が無いストレスを解消出来ぬ酒を飲む程縁を迫る男のエゴイズム	咲きましたチューリップ切って仏壇へ 朝焼けに今日の命を預けます 君恋し今は遙かな雲の峰	つ当りけられた石ころ笑うてる 起き目はもう刀折れ矢も尽きる 起き目はもう刀折れ矢も尽きる	病める身に床の桜が美しい 清流のながれに拾った詩一つ 大阪市 大阪市
新	直		久	行一	西
尚	原		保	天	Л
回天子	七面		正	千	善
子	Щ		敏	代	紫
他人より初代は身内に厳しすぎパン食に馴れゆく母のしたたかさ雪の降る女人堂にも出勤簿	妻だけが信じてくれるだけでよし真実が最後に勝った日の笑い	月の風に身の風に身	転勤のうわさロボットひそひそと 吉本が目をつけそうな隣人で と	落ち葉かぜ池面へ鯉の顔出させ 高社来て老舗の顧客まで間引く 産社来で表舗の顧客まで間引く	服るための酒が増えてく管理職 にんだんと金で買えないものが減り だんだんと金で買えないものが減り ないものが減り
	村乡	坪	欄	西 筒	平
	田	田		川井	田
	周	冬		景朴	実

浜 H 久 米 雄

春 を 3 服 0 3 鏡 を拭 つ言 Vi てい 7 確 か 不 80 満 3

一逝

人 <

う

0 酒

坂

酒

量

をぐっ

と減

らさ る

n

老 春 合 点 Vi 風 0 0 行 中 を か 步 X 男 10 て立 0 不 ち 勉 強 止 r)

長 野 文

庫

臍

輪 罪 我が

を

か 1

1+

7

洩

n

た 揃 10

内

緒

かい

風 训 季

13

なる

10

1

道

具

う

駅

居 JL

基

地

女

3

かい

0 緒 線 かい から 切 行 方 n 不 す 二浪 明 0 吞 13 みテ 春 D ぐる

3

明

月 原 宵

花 動 工 菜を切 n 花芽 つけよう

が耐

た

鉢 虞 美 な Vi 草 かい かい 役 咲 13 7 7 10 0 女 3

春可

0

爱

よく

3

13

病

院

は

す 眠

0

除

うれ 若 3

13 寝 恢 す

復

ぬ期

財

布

1

i)

II 癖 解

か

12

頼

n

る

0 n

かい

無

陽 腕

0 な

か

b

好

きなひと来そう

き

戦

13

0

顏

となる

1] 炎 組

1 中 解

て二次会は付き合

わず

割烹着 えてい

岩

柳

潮

病 病

居

7

寸

結

室

0

狐

独

ラ

才

を抱

て寝

真 花 [1] 昼 冷 かい 間 止 之 7 0 すい まで 街 1 狼 から 救 楽 1) 車 か かい 走 ta 相 合 るぬ 愈

尼

緑 之 助

m; 村 H 満

後家は 転居して隣

んと鰥夫で色気のない話

1)

0

大がもうなつ

7 原 稿 0 荷を背負 Vi

酒

b

n

翌日 の何を欲しがる左手や はけろっ と好 (きの すも言 b

す

天寿の叔母に

春 彼岸ゆっくり弥陀と語るべし

本 田 恵

朗

古傷をなめるとちょっぴりくすぐっ 薬までが彩とりどりにおしゃれして 歌 イスキーで洗うと老醜 高 らかに戦争はもうごめん

軍

ウ

+

"

と消え

民謡

が歌えるのどに生れ

逃げ出すと雑

兵 僧

並 0

に扱 É

to 指

n

诵

1)

雨

恋をする青年

13

黒

JII

香

池

0

白磁

0

よく笑う女でスパスパ煙草吸う 橘

高

薰

風

枝垂 話髭 桜 丸山弓削平氏川柳町の名誉町民となられる と女の の殿下じゃなか 美し 雪崩 0 た か

が拍手しているさわやかさ

げて陶淵明もお祝 寺尾俊平兄東洋樹賞を受賞

Œ

本 水

客

山うどのほろ苦きまま風邪 歴史とはこうだと崩 竹はぜる音に旅 瓦を黒く染めて過ぎ ような城 人眼を覚ます n た土 下 田 0 辟 i. す

][[久良岐の「川柳梗概」の価値 柳 太平 記 (49)東

柳維誌、連載)を今回も引用させて頂く。前田雀郎「久良伎先生伝補遺」(昭和37年)

先生(久良伎)はこうして川柳を自らの仕 事として与えられるや、兄事する子規の俳句 における、また短歌における革新運動をかえ りみ、川柳にもそのことを同時に思いたたれ たものと思われる。それにしてもかつては たものと思われる。それにしてもかつては たものと思われる。それにしてもかつては たまで罵り、短歌以外の短詩はこれを卑んだ とまで罵り、短歌以外の短詩はこれを卑んだ とまでぶ、当時にあっては、その俳句のまた下 位にあるかの如く世間からみられていた川柳 位にあるかの如く世間からみられていた川柳 に、かくまで志を掛けるにいたったかを思う に、かくまで志を掛けるにいたったかを思う

のである。

「別に任ずる処あり」の自覚は、川柳革新の事業こそわが任ずるところとして、亡き子規に対する答えであると知ったにちがいない。規に対する答えであると知ったにちがいない。 明治三十六年九月、先生は早くも金港堂より 「川柳梗概」の一書を発表、自らの川柳観を世に問うている。この書は先生における―というよりもわが川柳革新運動の第一声ともみられるものであるが、こういう先生の川柳に対する卒然とした傾倒ぶりの中に、その覚悟の程も思われるのである。

先生の川柳革新運動の、子規の感化に負うところ少なからぬことは、先生自らも、門下や二ろ少なからぬことは、先生自らも、門下や井卯木著「川柳江戸砂子」の序文中に記されているが、その方法もまた子規のそれに学ぶところ少くなかった。当初狂句打倒を以ってこの運動の旗印としたのは、子規における日並排撃にならったものであることはいうまでもないが、子規が俳句革新を志すや、先ず自らの俳句観を確立すべく、その基本としてこれが古典を広く渉猟「俳句分類」の大事業を完成したのをみて、先生も運動開始に先立を元成したのをみて、先生も運動開始に先立ち古川柳の研究に努力を傾けた。「川柳梗概」ち古川柳の研究に努力を傾けた。「川柳梗概」の著はその成果であった。

しかし子規がそこに立って自らの道を発見することを怠らなかったのに反し、惜しい哉することを忘れたかのようであった。先生が川柳を以って江戸人の趣味的所産であるとし、美のみがそれの目的であるかの如く断じた偏狭にそのことがうかがわれる。

ち得ぬ田舎漢は、この文学に参する資格なし でって江戸人の生活感情(気分)を自らに持 だって江戸人の生活感情(気分)を自らに持 とも江戸を離れては成りたたぬ文学である、 とも江戸を離れては成りたたぬ文学である、 があるがら、今後といえ

この川柳観は、勿論先生の好尚に偏するも

結果ともいえよう。 は先生がその好尚においてのみ川柳に対した 嘆きを古川柳からきこうとしなかった。 これ 的生活のみ興味を感じ、その裏にある人間の 受取り方に何か性急なものがあったのではな いかと感じられる。即ち先生は、江戸の表面 うことのなかったのは、先生における川柳の にある。しかも先生が川柳をここに置いて疑 川柳の本質をいうには甚だ遠いところ

易な途を先生に選ばせ、その結果としてこう 先生自身の好尚においてこれを受取らせる安 によってこの事業が、多分かなりの焦りをも いう川柳観を先生に抱かしめるにいたったも が古川柳に対する先生の深いさぐりを妨げ、 ての先生に果してなかったろうか。この焦躁 わば功を急ぐ、この気持がこれが開始に当っ って行われたであろうことも想像される。い れたかも、自らそこに頷かれ、そういう先生 うと、先生の川柳に対する関心のいつ頃に生 ういう読みの浅さを、川柳運動の開始に当っ くから川柳に志すところあったとしたら、こ て決して見せはしなかった筈である。そう思 先生にしてもし従来伝えられるように、早

のと思われる。

短歌はいずれも革新されてその第一歩を踏み 点は「川柳の革新」という項で、小説、俳句、 ういう内容のものであるかというと、その要 出していることを述べたあと川柳について さて「川柳梗概」(明治36年9月28日刊) は、ど

川柳革新の意図を明かにしている。 と述べて"初代川柳に還れ"をスローガンに 天明の著に復活せしめ、更に一歩を進めて明 この川柳なるものをして、よく宝暦明和安永 ければならぬと思うのである。それ故に余は 治の新狂句を作り出すに努めたいのである」 明治の新狂句も亦他の韻文と伴って発達しな い狂歌といいみな発達して遺憾なかりしが、 のである。天明の時代、和歌といい俳句とい

点を滑稽においた点である この著で最も注目すべき点は、 「初代川柳の狂句が文学的であって、後世 川柳の革新

しかしその十七章の結論で

ば能事足れり キーが屁を放っても、モーパッサンが泣いた のである。要は只縦横に奇警の才を応用すれ って隣りのおんばさんの泣声程にも感じない (川柳)の場にあっては、ゴル

坊は「川柳」(明治38年12月号)で に指摘したのが前記の雀郎稿といえる。剣花 散慢で薄手である点である。その欠点を明確 とは疑いないが、どこかその論旨の構成が、 治柳界にとっては、一大警世の一文であるこ 前風である。要するにこの書は、実態薄き明 と述べているのは、 いかにも久良伎の江戸

ものたるを解しうる青年にその研究を望むも

余が希待する所のものは、一に文学の何

戸っ子なる哉」(剣花坊記 上の勇気あるを知るべし、 戸ッ子にあらず久良岐郡(神奈川県)で江戸 江戸ッ子より剛い所あり、 して常に口癖に江戸ッ子を振回す点において ッ子に非ずと(中略)自ら江戸ッ子なりと称 島ありといわば人は笑うて言わん、阪井は江 江戸ッ子として名ある者、榎本あり、 確かに江戸ッ子以 アー久良岐氏は江

年、両派の激しい柳誌合戦にと引継がれてい 久良伎対剣花坊川柳二派の確執は、やがて後 この剣花坊のヤユ的記事にみられる通り、

然なるべし、悪フザケを為すべからず

ある問題を捉えないで、無暗に滑稽を製造せ

の狂句が非文学的に堕ったのも自然に可笑味

んとして失敗したのである。滑稽は須らく自

誹 風 柳多留 廿六篇研究

Œ 範 石 H 成 佳

木

敬 给

得

木

真

学

黄

石

H 六

屋 Ш

郎

松 岡 Ш H

甫 光

101 役者の法事石橋や道成寺

102

の追善興行を言う。 めに営む仏事や年忌をいうが、ここでは役者 丞の当り役。「法事」は死者の追善供養のた 本多=「石橋」や「道成寺」は共に瀬川菊之

橋などがふさわしいので、屢々演ぜられると いうような意味となる 本句では、役者の追善興行には道成寺や石

多田二赞

岡田二同

岡田二同

多田一賛。

句

行ならではの華やかな雰囲気が感じられる 賑やかにシャン~~と手〆めを行う。芝居興 見世狂言の前祝いに、役者とうち交じって、 顔見せ前の手打式をよんだ句。十月晦日、顔 本多=「てうちく」は手打ちくである。 にきやかさ役者とてうちくくする

剣菱の大紋ンを着るにわかあめ

103

樽を包んだ菰に剣菱の紋があるからという。 て走るというのである。出先きでのとっさの の句によってもそれが知られる。 らせたもの。「剣菱」の酒名のおこりは、酒 た紋所の名で、菱形の四隅を剣先の形にとが 『守貞漫稿』に「古今第一とす」とある。ま 句意は俄雨にあって、剣菱紋の菰をかぶっ 進物の樽剣びしに縛の縄 二六:40

人間をわらづとにする俄か雨

110.6

本多=「剣菱」は摂津国伊丹産の酒の銘で、

からこするそばへけんが、持って来る酒であることは今日も同じ。 銘柄のいい銘木=賛。「剣菱」の句は多い。銘柄のいい

からしするそばへけんびし持って来る

安六鶴1

岡田 二回

多田=賛。

剣菱を墓へかけたき吞仲間

| 田田|

104 ま、事の世帯崩しも泣き別れ

本多=「世帯崩し」は一度所帯を持って夫婦別れした者をいう。

実生活で夫婦が離縁ということになれば、実生活で夫婦が離縁ということになれば、子供のまごとの夫婦喧嘩で泣き泣き別れる。子供のまごとの夫婦喧嘩で泣き泣き別れる。子供のまれの悲痛をさらっとよんだ句。

南=子供のままごとを引合にして、夫婦離別南=子供のままごと遊びの喧嘩別れを、世帯崩し体で、ままごと遊びの喧嘩別れを、世帯崩しと洒落、大人の夫婦別れと同様に、泣き別れと洒落、大人の夫婦別れと同様に、泣き別れ

ままごとに迄女房とこましゃくれ

宝一二義5

多田=南氏説のように考えていた。ほんとうの世帯があれの時には泣き別れするが、まま事の世帯があれる。

鳩の豆楊家の娘売ッて居る

本多=浅草観音堂境内に多くあった楊枝店を

美人の楊枝店の看板娘がにつかわない鳩の 豆を売っているというのであるが、豆に女陰 豆を売っているというのであるが、豆に女陰 売とおぼしき行為も行っていた。 楊枝見せ生きた豆をも売る所 三七・25 楊枝やハ戸板に豆を出して置 ニニ・19

圏田=同。

106 居り直されしゃうだんだく

本多=若い娘と打解けて話すうち、つい悪戯が「冗談だ~~、この通り」とその場を取りが「冗談だ~~、この通り」とその場を取りれ、きっとなった娘の気丈さに圧倒された男れ、きっとなった娘の気丈さに圧倒された男

小野=対手は「わるがたい後家でだん家へはっと知れ」(二二・5)の如き僧侶とみても面っと知れ」(二二・5)の如き僧侶とみても面

多田=賛。「こそぐって見たればぞんの外しろう。

107 御てうあい石になっても又わられ岡田=やはり句は生娘が適切。

本多=玉藻の前をよんだ句。玉藻の前は鳥羽 ・木多=玉藻の前をよんだ句。玉藻の前は鳥羽 ・大金毛九尾の妖狐で、安部奏成の調伏にあい 大小・上総之介の悪狐退治で射止められ、老 之介・上総之介の悪狐退治で射止められ、老 、こんどは三浦 と介・上総之介の悪狐退治で射止められ、老

石になってもまた割られるとは、なんと御石になってもまた割られるとは、なんと御を割る意と、男が処女と交合する意の「割る」に石を割る意と、男が処女と交合する意の「割る」に石畜生の石になっても又わられ 四五・26 八木=賛。バレ仕立。

多田=賛。
多田=賛。

四.30

岡田二同。



JII

香

選

牙抜 医師を信じているのにやっぱり神 予定より手術が長引いている不安 手 来る度に 隙のない部屋に待たされ落ちつかず 定 G いい縁を苦手な伯父が持って来る 年の 摘 18 字切ると神 n 1 8 かれてから狼の妥協ぐせ 0 室 リッツ がば蛙 めふっ 一の長 ない職人にある誇り 何 皺が一つもない若さ U V かを壊す孫を待つ プ横に活けても立ち上り よっこり顔を出 廊下へ子を送る は微罪になし給う と戸惑う揚げヒバリ 松原市 島根県 今治市 14 本 槻 矢 3 谷 野 洋 佳 子. 葉 葉 岐行く 色褪せた日除帽子へ蝶あそぶ くちなしが匂う未完の絵は夏 路地を知る風が集まる通り道 1) 看護婦の 哀しみが墨絵ぼかしに梅雨 とぎ汁をためて筍見て歩き マネキンが夏を呼んでるサングラス 春風がどうも悩みを誘うら いのない噴水でくたびれる < ハビリへ気の遠くなる努力積む ばくの余生 道そこで兜の緒をしめ 春においてけばりの風邪を引き ひと言部屋も温うなる へ一途な画架をたて あがる 3 大阪市 角 H 野 13 阪 秋 か T-す 子. 步 1.

知らぬ顔しても野良犬ついて来る 大声で笑える人が先に逝き 気晴らしのつもりか母の一人言 店先で孤独に耐える招き猫 趣味に生き老女絵筆へ余念なし 花吹雪掃くにはおしい尼僧立つ 花吹雪掃くにはおしい尼僧立つ	この俺もにせものだったかも知れず 別刊誌の見出しこれでもかこれでもか 別刊誌の見出しこれでもかこれでもか かれでもか が かったい かい	這いだした孫はわが家の王様で 東心の笑顔はいつも美しい 東参すると少し安らぐ風がある 中立を守る黄色い旗を振る	
T	村	市	
玉	枯	有以	i
子 子	梢	栄	
年金を頂くだけの貯金帳 なたね梅雨厨は豆の煮える音 鉢のバラ私の方へ向けて寝る アデランス遊ぶ頭にしてくれぬ 恋一つ拾う若さが見当らず 米子市 音の無い耳も心は豊かなり 正面へライト花嫁引きたたせ 藁ぶきの歴史を守り過疎で老い	訪問の先生体育だけをほめ さわやかな丘に建ってる少年院 おのろけも半分入れた母の愚痴 いさかいの妥協を知らぬ夜の長さ	たいのつぶやき滴になって落ち がさな石でわたしの城を積みあげる リロバンを弾くと欲が湧いてくる 質いてまた躓いて強くなる であたしの城を積みあげる	既食天
H	竹	西	與
ф	内	村	山
亜 弥	花 代 子	かすみ	美 智 子

一浪のうちはくったくなく笑い 川西市 氏 林 天職があるから四十惑わない 胃カメラを飲む朝四十を意識する 男四十妻堂々と太ってる	の地図句帳を埋める切符買う 坊主春の祭りの寄付がくるの出ない父に一本道続く の出ない父に一本道続く 菊が伸びると春の甲子園 西条市 片 上	マニキュアが少しお洒落な年にする 整の哀れ首からたち切られ 大阪市 藤 森 ・ 整の哀れ首からたち切られ	美辞麗句裏にのぞいていた野心 関し舟花嫁さんが島へ来る 渡し舟花嫁さんが島へ来る 海上世 ぬ頃が良かった夫婦仲 出世せぬ頃が良かった夫婦仲 東子市 小 山 変 東子市 小 山 か 東子市 小 山 か 東子市 小 山 か 山 か 東子市 小 山 か 山 か 東子市 小 山 か 山 か 山 か 山 か 山 か 山 か 山 か 山 か 山 か 山	ı
洋敏	明水	小 雅 子	悠泉	
金婚の歩みに似たり沙羅双樹 西宮市 藤山門を車で過ぎる花明り 西宮市 藤気まぐれに編んではほどく毛糸玉気まぐれに編んではほどく毛糸玉	年はいとは言えぬ妻となり 中に自分の脈を確かめる 西宮市 奥 が悪いと妻は窓みがく 西宮市 奥	な光で撮って小皺が消えているを袋集めて旅をなつかしむ水戸市 上鈴水戸市 上鈴水戸市 上鈴	く間借りの壁の世界地区 のも混り駅が混む のも混り駅が混む 兵庫県 中から朝夕歯を磨く	にも自信わが家の働き手 富山市 舟
沢村	H	木	H	渡
暁 宏	光	春	白	杏
明子	子	枝	李	花

わをきれいに見せていことよ微熱に妻のいことよ微熱に妻の	母が入れ紐は親父の荷が届き時刻表通りに別れの汽車が来た時刻表通りに別れの汽車が来た以下同文の名に連って義理を立て以下同文の名に連って義理を立て	ば格剛の 好が裏し でをが 悪し	・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・
東新居	岸	*	庥
原田	本	H	野
福 胡	豊平	喜	燈桌
子 子	次	郎	玄
īfī ī	一日のドラマが終る布団敷く 旅行プランストの日取りとは知らず 旅行プランストの日取りとは知らず がいたけの服出して見るデートの日	た 回 顧 談 だ 回 顧 談 だ に 回 の 彩 に の 利 る 身	ジョギングも大一匹にコース変え を構立の小道埋めている を構立の小道埋めている を動する を動する を動する を動する を動する に対する にが にが にが にが にが にが にが にが にが にが
	武	野	関
仲 E	E E	坂	П
き く 子 音	帆 わ	な	幸
子	崔 点	74	子

市 川 鱗 魚 スコールのような笑いをおいていき 市 川 鱗 魚 スコールのような笑いをおいていき 影法師嫌な真似までさせられる 口説かれています夜景がきれいすぎ 早く渡らないと虹が消えそうで 中 原 好 恵 雪つかむような話にまどわされ 一点の雲にだまされ傘を持ち 次で下車言われてねむい春の旅 つまずいた石がまだあるもとの場所 寝つかれぬ夜は腰まで痛み出す ね歌山市 は こ みの虫の孤独風にさからわず 育一 みの虫の孤独風にさからわず 育一 みの虫の孤独風にさからわず 育本区を再入カイライン今青春のど真ン中で月がゆれてる露天風呂 石 黒 若 恵 まだ落ちる花びらあって風止まず 春風を呼んで和服の裾さばき 落ちかけたボタンで今日をやっと過ぎ 春風を呼んで和服の裾さばき 落ちかけたボタンで今日をやっと過ぎ	2 D K 秋刀魚焼くのも儘ならず古日記焼いて再婚決意する根性の安売り社長の立志伝	大阪市	合格の母が泣き出しそうな頻五つ子が忘れた頃になるニュース	らず	世話好きか時にせっかいやきにされ	任の先についてる吾れバムに女房にほれ	の夢子の夢東大出たる夢	山口県	い日も母	いやりわからぬ夫とわかる	カーテンを斫しくしたい春の虱公園の子供は夏も冬もなし	守口市 中	白無垢のねがい長持ち唄の里	to	向日葵が妊る夏のさらし首黒子、紅、眉毛働く面かむる	岐阜市	ぐいと消すタバコに男の心見るままごとの客にされてる雨の午後
無		11															
ロジャップ公園で飲む孤独の日 マンカップ公園で飲む孤独の日 マスコールのような笑いをおいていき ジ表師嫌な真似までさせられる ロ説かれています夜景がきれいすぎ 早く渡らないと虹が消えそうで マー点の雲にだまされ傘を持ち 大で下車言われてねむい春の旅 つまずいた石がまだあるもとの場所 猫つきの再婚瘤が荒れてくる スカイライン今青春のど真ン中 スカイライン今青春のど真ン中 まだ落ちる花びらあって風止まず 春風を呼んで和服の裾さばき 落ちかけたボタンで今日をやっと過ぎ 自動ドア開きたくない客もある 和歌山市 まだ落ちる花びらあって風止まず 春風を呼んで和服の裾さばき 落ちかけたボタンで今日をやっと過ぎ おのは、おりのは、おりのは、ないと虹が消えそうで 日 日 日 日 日 日 日		1 for			不 一											559-5	
紀 御 若 保 芳	動ドア開きたくちかけたボタン	まだ落ちる花びらあって風止まず	2中で月がゆれてる露天風呂	カイライン今青春つきの再婚瘤が荒	の虫の孤独風にさからわず。	つかれぬ夜は腰まで痛み出す。時間置きも手包も強人でる	利に熱	若き日の褪せた写真にある温	山県	つまずいた石がまだあるもとの場所	てねむい春	雲つかむような話にまどわさ		早く渡らないと虹が消えそうで	説かれています夜景がきれいす法師嫌な真似まてさせられる	スコールのような笑いをおいてい	ンカップ公園で飲む孤独の日
紀 御 若 保 芳																	
			久子														

筆ざわりほんのり温い和紙の味 点滴になれて天井に柳句読む 点滴になれて天井に柳句読む	i L	均寿命目安に老いの設計図し僕が死ねば再婚すると妻ンドルの目に歩行者のルー	各写真理想に合って春を呼ぶる写真理想に合って春を呼ぶ	藤花踏んで青春の夢消してゆく富士無心。樹海は魔性人を呑む。西宮市である。	(こ) の(こ) が(こ) が(で) が<
藤	1	茑.	中	朝	久
田野	•	本	谷	山	井
泰 テ		H	利	于世	富
子 ル		道	美	子	子
一枚の電報雨にぬれて来る 下札の裏にかけひきある匂い 来子市 正札の裏にかけひきある匂い 来子市	ー聞える洞窟並 ですと告げる今	のが眺	ロボットにまだまだなれぬ胃が痛むまた別の敵が身内にいた誤算破れ太鼓そんなおやじの労働歌	靴のひもむすんで今日に身がまえる窓際にきて引退の肚を決め	一つ手前という電車隣の席に来ない人
#	ITI	j=1	失	וונל	江
it	山脊	H	萩	藤	副
みど	戊	静	j'į	茶	=
里	風	ĬΙ	子	人	牛

大阪市津山刀水がるもの無いが心はみち足りる 総入歯福豆一つもてあまし、 兵庫県 兵庫県 兵庫県 兵庫県 兵庫県 本脇 和子	もると影	地下鉄が田圃の中にビルを建て 八尾市 松 下 蕉 露火遊びの相手の亭主から電話 八尾市 松 下 蕉 露おいしい物あるから来いと受話器から	切は驕り	おもはゆく老いて嵯峨野をデートする今朝の目醒め何かよい事ありそうなら強りの屋敷子もなく薔薇の咲く 藤 春 子の強りの屋敷子もなく薔薇の咲く	ま見
男とは泣きたい時も酒にする 会治市 渡 辺 南 奉金を買う話夫婦で充ち足りる 全治市 渡 辺 南 奉	光まぶし	雨だれのリズムを聞いて一人旅 歳だなァ父の小言にかどがとれ ないましたがとれ	加加	放郷に帰る何とかなりそうで 出世せぬ同士で友情長続き 出世せぬ同士で友情長続き がずかしい祖父に近所の子がなつき だずかしい祖父に近所の子がなつき	

見舞品食べては帰る見舞客 夢一つ消えた出逢いの一ページ 夢の来る心構えに自問自答 店舗 をあれて花は咲き	室もここにはここの世院も間近か退屈の日が	・日が 手	東を果して夕陽皿を囲んで話ま	ハンカチを敷けば桜が散りかかり 栄転の噂そのまま春が過ぎ 島根県	ぎのい
浜 山	神	波。	Щ	星	大
本 田	崎	た	下	野	野
子 喜 代	紫	だ	月券	ffi	武
代子	泉	お	_	ĪΕ	太
国鉄をけなしながらも乗る弱さ 型書より妻の叱咤が身にこたえ 聖書より妻の叱咤が身にこたえ	党パだ	の町今日も一	梅雨溜りもない舗装の道続く快食快便快眠でちと侮られ	写真機に向えば真ん中えらぶくせエリートもマンガ読んでる裏の顔控え目が揃い真ん中あけて座す	保室のルール覚えて母となる に年という安心は母にない を年とがしたくて毎日医者通い
ļ ⁱ t.	萩 野	描	堀	宮	足
H	II.	田	iT.	崎	並.
昭	唯	新一	百	シマ	由美
治	夫	郎	代	子	子

会 西	
春 裕 テ 松 伊	Í
草 美	
草 美 ミ 朗 志 お 子	ş.
るの の」に 書たさ 薬きへ ず目出 雨に米 のの	
にきひ気にもせず 空を見る旗日 党みんな来る ウンドばてている 足の並びけり 日も外食で 同士ゴザを敷く 同士ゴザを敷く 同士ゴザを敷く 一つ効いて来る のたよりにある乳房 間山市 を吹いてゆく 島根県 を吹いてゆく 島根県 島根県 島根県	者は
福 吉 原 上 椎 権 垣	
間 末 田 内 尾 安	
芳 謹 凡 利 公 達 太 太 一	
枝 郎 郎 凡 子 郎	

煙ったい存在となる古い顔 鯛の目は白し水槽でまだ泳ぐ 忘れてた手紙と共に旅終える 尼崎市	つっしの	経験談古い古いと子に言われ八ヵ月母となる日の毛糸編む東大阪市八ヵ月母となる日の毛糸編む	花冷えに久しき友も病む便り 良妻で賢母でもなく我が支え 良妻で賢母でもなく我が支え 愛知県	住職も楽な世になり皆テープ 人試パス孫にステレオ買わされる 岸和田市	二日酔熱いコーヒーで酔いさまし 生きざまがつい顔に出るおそろしさ 兵庫県
中大	荒	金	[王]	吉	円
辻 工	田	本	分	水	增
干 静	2	不	甲子	照	貞
子 子	る	不二夫	郎	江	子
引越しの度に児が増え家具が増え 満開の桜が旅人を和ませる 境港市 旅立ちの日は雪土佐路は花吹雪 境港市	城下町銘菓参勤交代と名づけ城下町銘菓参勤交代と名づけなり上の道二十年	ひと言を聞いたばかりに貝となる一線を越える女が目をつぶり一線を越える女が目をつぶり	さりげなく無心の金を手渡され ブルータスのように国鉄きらわれる ストーブを片付けた日に戻り冬	のこされた哀しさ自由などいらず ひとり居る寂しさに耐え振る茶筅 野の花は優し墓場でひそと咲く	一つ二つ心に恥じぬこと重ね 爪先立ち背のびするよにハイヒール 相性の良さ夫婦の歩幅合っている
部田	Щ	堀	八	板	浜
木	本	П	木	東	П
莀	坎i	欣	芳	倫	秀

水

子

子

栄

斉

八尾市	うっぷんを晴らして夜を寝つかれずゆるすだけのゆとりほしくて花を買う		禁煙の祈願寝煙草止めただけ	満ま	職安を超満員にする不況	青森県	花の下無口な男の芸達者	どちらでもいい子が産まれ欲を出し	悪役はきちんと時間に逮補され	島根県	転宅の部長に配下勢揃い	嘘つけぬ男の椅子が固すぎる	日の丸を立てて祭日らしくなり	鳥取県	雨垂れが電線に描く今日の歌譜	鳩にやる餌を雀がつつきに来	民踊のさす手かざす手花が散る	大阪市	平和だな若いママさんも趣味を持ち	七ころび八起き未練のない余世	春の膳菜の花漬けの味に逢う	島根県	イバラ道の向うにちらちらパラダイス
Ш			公.			岩				石				羽津				泉				岩	
下		7	本			淵				形				Ш				H				佐	
みつ			よ る			_				水				公				そとえ				富	
る		ð	4			星.				煙				乃				え				子	
七人の敵を生み出すランドセル	花見の宴花はついでに見て帰り大阪市	つい	半額で買えばハい事したようで米子市	糟糠の妻に感謝の思いやり	お父さんと婿に呼ばれてとまどう日	大阪市	土地柄がどうのこうのと老母の愚痴	過疎の村翁ひっそり牛を飼う	泉佐野市	歳なのか独りが気楽な日の多き	紅梅の一枝貰ってからの縁	島根県	飛ぶ鳥もときに危い空の道	この峠越えれば変る国訛	倉吉市	地図で見るかぎり日本小さい島	一枚のカードの中で管理され	島根県	楽隠居出来て父権口にせず	山桜去年の位置で春を告げ	岡山県	唐紙のむこうで老母の子守歌	どんくさく見えても夫婦仲が良い
						4.6			真			藤			今			岩			池		
	服		沢			越			大			7245			50			3-4			(III		
	服部		沢田			越田			具 崎			原			村			H			田		

外車に車間距離長く取り	堺市	桜散る後追うように咲くつつじ	信号は青でも走って渡るくせ	大阪市	春の海のらりくらりと躱される	蟻二匹逃がしてドラマまだつづく	鳥取県	手作りの小箱に思い幾年も	腰のばし花見の出来たうれしさよ	大和郡山市	一周忌家族でしる粉父しのぶ	今年も庭の金柑に鳥が来る	大阪市	年金を受けてしみじみ有難し	古里の訛りで山葵持って来る	高知市	言い過ぎたわが身勝手は酒となる	来賓が去って余興に花がさく	吹田市	ぜんまいの気儘に反りて荒莚	働いて俺が飲むのに妻の愚痴	高知県	窓際に西陽がきつい初夏となる	影法師までが縮んだ定退日	大阪市
	田			平			和			岡			横			北			西			Ш			吐
	辺			井			井			田			井			Ш			岡			下			田
	哲			路			観			すみ			富久			竹						弘			公
	寿			芳			洋			れ			子			ilij			盟.			舟			
	通天関庶民の街の値の安さ	敵味方五輪塚ならぶ奥の院	奈良県	幼な児が泣く赤ちゃんを慰める	ロボットが人間様になりすまし	大阪市	娘達何杯目よと汁粉会	泣かされて帰る吾子に腹を立て	東大阪市	女性という動物に老いうとまれて	わが咳が尖って家にだれも居ず	兵庫県	蜜求めぐるぐる回る蜂の群れ	惚れたのでなくて尊敬してるだけ	東大阪市	本心はいやになってるこのポスト	相づちをうって上司を意識する	橿原市	春が来て値下げの毛皮みすぼらし	八十歳夫婦ゲンカの種つきず	富田林市	屋外は春が待ってる日曜日	墓石を洗いつ祖先に話しかけ	兵庫県	顕微鏡覗いて奇麗好きとなり
			宮			Щ			坂			野々			Ξ			西			田			藤	
			Ш			脇			本						宅			本			形			原	
			古都路			正之			喜洗			ゆう也		(哲夫改め)	旭			保夫			美緒			捷一	

川柳塔賞 路 郎 賞 候 補 作 口口 発 表

自 57 年 1 月

至 57 年 4 月

号

号

路郎賞候補作品

柳 花

(到着順)

人の情がふつふつと煮える関東煮

千枚田耕し夫婦島を出ず へそくりが小さな主張持っている 四季のない花屋で春の彩を撰る 老骨にむち打つ等はしてならぬ 友多き倖せ年賀はがき購う 河村 操子 日満

秒針がガクンと動き昼休み 血の濃さに傾むく独楽の芯である 退職をすれば部長も粗大ゴミ 江口 河野

国鉄のような経営ならできる 春の靴遠いとそろへ行きたがる 来る人が来て去に元日黄昏れる

> 小出 市場没食子

> > 寝たっきり幸か不幸か胃が達者 よく似合う服で鏡がはなさない 貧しさにいて倦怠のない夫婦 山内 西村 内芝登志代 早苗

IE 本 水 客

見舞客に白髪染めてたのがばれる

老いぬれば姉妹たがいに案じあ 私をころす雑布縫い溜める

耐えている女が叩く干かれい 文法にあやまりがあるコマーシャル 化粧しているなと妻へ安堵する 企みがあり後ろ手に戸を締める 口下手だから信用をしてくれる 谷垣 長野 福島せつ子 古野 柴田英壬子 史好

帰るには早い時間に会終り 来る人が来て去に元日黄昏れる 脱ぎながら女 男を近寄せず 落葉さえ集り易いとこがあり 市場没食子 藤後 室谷 実男

料亭のネオン筆順たしかなり

竹内

智子 紫錆

足袋を穿く姿に女まだ残り 三月がゆらゆらゆらと経ちにけ

手の鳴る方へ行けば硝煙匂うかも 野村太茂津

コンピューター政治的判断には参り

子を産まぬなどと勿体ない話 福本 遠山 可住

橘 高 薫 風

大いなる時間が動く星の位置 電柱を登って飢えたかたつむり 夢の痕は罪とも冬の大文字 正月も呼吸こらすよう塀の町 千匹の鬼にもなろう千羽鶴 如月や江下北川作江たち 九官鳥口止料は何がよい 青春譜想われびとは想い人 私をころす雑布縫い溜める 稲田 高杉 井上柳五郎 岩井本蔭棒 藤田頂留子 鬼遊 豊作

その人の罪には触れず輸血する 仏像の後ろへ回る不信心 山本 桐下 浜本久仁於

尾 栞

西

暮しとは日々ガラクタがふえるなり

自衛隊高いおもちゃを持たされる 殿さまの知恵が生きてる紡ぎ唄 浦野 和子 史好

楢山より寂しい部屋がマンションに 三面記事私であったかも知れぬ 出 美穂

好々爺になって欲しくて甚平縫う 河野 君子

そろそろやないかと和尚から年質 この音この音数の子はカナダ産 柴田英王子 西出

ピエロにもなります制服着ています 勉強を言うと虫歯がまた疼く 熟年へまだ助走路をかけ回り 小西 森田カズエ 仲どんたく 雄々 重人

不整脈人のはかなさ知る夜長

食べものを買いすぎるのは貧しさか 本間満津子

おおミステークがむしゃらに金を貯め 芹なずな淡いかなしい母だった 西山

窓の影女性課長が髪なでる ブルドッグお前の年だ笑ろてみな 竹内 宮尾あいき 紫錆

負け犬の男へそそぐ小糠雨 友だちが何人もいる町の大 鍵っ子の画帳の色にある憂 あたたかい心を木洩目からもらう 生を馬鹿になり切るむずかしさ 恒松

思い出に炎の色と水の色 澄みきった秋へは嘘を言いそびれ 親切な人だけ見える仔大の瞳 川口 錦織 仲どんたく 文子

度

履歴書に載せぬ体験だってある 煩悩へ角度を替えて得た悟り おにぎりと換えた猿知恵笑えまい 杉浦婦美子 内芝登志代 弘生

ビター文持たぬ時だけスカッとし 鳥啼いて夫婦の会話に詩を呉れ 世の中は一人笑えば一人泣き 香たいて人生の深さに沈み切り 見えすいた上司の嘘を聞く真顔 一好意を金に見積るのは止そう 天正 川上 工藤 安平次弘道 鈴木村諷子 渓水 瑞枝 甲吉

本 多久志

継ぎ足した鉛筆願い叶いそう

野坂 奥山美智子

なみ

有働 高杉

芳仙

天職を得てから寡婦の若返えり 素晴しい世界が見える子の瞳 ペン持つと自由の異はえてくる

八木 工藤 千代 端枝 叮紅 仕事場へ今日のリズムを取り戻す 住み慣れて円くくぼんだ妻の椅子 どこにでもある倖せで満ち足りる

共稼ぎ手抜上手の妻となり 父が積む積木を妻と子がかばう 渡辺 工藤

坂部紀久子

東原

寺沢みどり

酒飲もう仕事のアカの沁みる日は

木枯しの中を夫婦で橋渡る 近道を見付けてやっと町に慣れ 本多 吐田

掌にまだ生きている落椿 清水 越村

谷 垣 史 好

川柳塔賞候補作品 西 田 柳宏子

満ち足りて女は過去をふり向かぬ 太陽の笑顔を独り占めにする 鈴木 奥山美智子 節子

種なしぶどう悲しいのかもしれぬ 枠の中妻はケロリと生きている 目隠しをするとうしろの人が見え 西村芙佐女 片上 明水

結んで開いてやがて一人になりました 寿命とは畳の縁にけつまずき 中谷 津山 利美 刀水

茶筅持つ雪の崩れる音のして 工藤 村上田鶴子

会うことにおののきのある寒椿 ひと様の毛皮を撫でて女です 現場で飛車が成るごとし 田中 藤田 泰子 杏花 11

子に残す雑木林の細い道 徹な背にひょっとこの貌がある

> 芳枝 郁栄

しあわせのひとつに綺麗な字が書ける

音沙汰が絶えて落葉をはいている 奥山美智子 松本はるみ

高 鬼 遊

Less estas esta

紅葉ほど炎えて静かに終りたし

寺沢みど里

たちくらみふと脳味噌のゆれる音

どの石のどれも仏の貌になり

平井

霧芳

村中を祭りの音にする太鼓

結んで開いてやがて一人になりました 善人がひとりだけ見た冬の虹 国分甲子郎 村上田鶴子 松本はるみ

グウチョキパア空の財布でよろしいか 冬至南瓜嫁と無言の日が昏れる 朝山千世子 高杉

男にも同じ音する洗濯機 七草のうちの五つで粥を炊く じゅず玉の逢えばちぎれる逢わずいる 浜口 竹内花代子 工藤 蕗子

> 用もない銀行が来て十二月 大臣に誰がなろうと日が暮れる 妻の名の貯金帳あり共稼ぎ 老兵の手の鳴る方にあるい くさ 大野 椎尾 市川 藤田 鱗魚

香 Ш 酔 Z

つるし柿するりと風がぬけてくる 吉田比呂子

刺し子縫う紅の糸なら啞になろ

高杉

千步

行列の逆行く蟻がこの俺か ナンテンが熟れると父の忌がめぐる 野々口ゆう也 奥山美智子

種なしぶどう悲しいのかも知れぬ

捨てかねて雑書ばかりの中にすむ 津山 刀水

若 本 多 久 志

子に残す雑木林の細い道 木枯しの中を夫婦で橋渡る しかしよく降る雪嫁のことになり 福間 清水 大野 田中 芳枝 康江 叶

雀にもぐずなのがいてはぐれてる 白菜を切ればザックリ冬の音 日溜りの話にしては生臭い 蔦本 星野 本多 佐々木 侑正

美しい恋でしたとは片思い 石仏の顔のゆがみを気にしない 日めくりの格言通りだったミス 片上 古田

選 集

(追 加)

眼を内に向けて真理がわかりかけ

越えてきた山河 人生の 面白さ

分限を知る余生にも夢多く

自

厨房にも入り老妻と共に生き

黙想をすれば自分を摑

み得る

同 人吟

前月号から―

井 文 秋

風来たり風去り人を消してゆく

すがだなあと思う。 界を、さらりと一句にまとめられている。さ かの命が失われて行く。こんな諸行無常の世 秀節の移り変りは早いが、その間にも幾つ

よくしゃべる女を裁いている無口

言っているようである。 振り返って反省したことがあるんですかと、 黙っている人、その心の中では貴方は自分を それを聞いているのか、聞いていないのか、 愚痴や他人のうわさなど次々としゃべる女

見つからぬ言葉さがしていた無口

良いのか整理がつかない。その内に会が終っ 言いたい事はたくさんあっても、どう言えば てしまう。あの時こう言えばよかったのにと 無口と言うのは口べたと引込思案が多い。

> 思い出しても、あとの祭りである。 なんとなく破滅に近い世に生きる

なければ生きていけそうもない。 き込まれる現代、その時はその時とでも思わ 間違ってボタン一つ押しても、核戦争に巻 太茂津

あかぎれの昔しみじみ白い指

昔を思う時、これでいいのだろうかと、つく してから女は楽になった。あかぎれに泣いた つく考えさせられる。 洗濯機一つを例にとっても、これを使いだ せつ子

子と同居手の鳴る方へ向くとする

かかれば渡りに舟、そうさしてもらおうか。 も心配でほっておけない。家へ来たらと声が と言っていても体が弱ると気も弱る。子の方 まだ元気なうちは子の世話になりたくない

妻の知恵信じ落目の靴を履く

これからもよろしく頼みます女房殿。 てくれていたんだ。働けるうちは働きましょ やりくり上手な妻のお蔭で薄給の僕を支え 赤いペン恥を晒してばかりいる

それを恥じる心はいつまでも持っていたい。 大国になってしまってうろたえる 校正のプロでもチェック洩れは出来るが。

の浅さ、貿易不均衡でまわりから攻められて 経済大国と言われながらも、資源のない底

> 右往左往、しっかり頼みますよ大臣さん。 憤懣をコトンと落す飯茶碗

と言いたそうだ。 可愛いさのない奥さん、俺は不機嫌なんだぞ ストレスの溜っているご主人、やさしさと

交際の輪が広がって知る自分

神夏磯

れることこそ肝心。 もいるが、自分を知って他人の長所を取り入 多く知る。欠点を捜して優越感を持ちたい人 交際がふえればそれだけ他人の長所短所を

バランスを頭に入れて粗衣粗食

は余生を長く生きる知恵でもある。 贅沢はせず栄養のバランスを考える事。これ 退職後の年金暮し、体に無理はしない事。

道がつき平和な村が堕落する

も破壊するようですね。 宝刀は抜かず和解の手をしめる

開発は自然を破壊するだけでなく、人の心

芝 登志代

訴えず、いつもこうありたいですね。 かしこい人達が寄ってるんだ、ストなどに

狂いなど無い筈夫の羅針盤

信じ切ることが出来るいいご夫婦ですね。

空財布花の心を知ったとて

給料日まで待てば花は散ってしまう残念



JII 竹 松 風

11

島 蘭

幸

Ш

幸

儿

Su

部 柳 太

生きている雪は焚火の中に降る

村諷子

判断せよと言われても無理なことで「生きて 最後の一行で結んであるとする。その空間を えば四百字詰の原稿用紙の最初の一行があり いる雪」は作者自身であろうか。 一この作品の内容は理解に苦しむ。 例

生きていることは挑戦であるとこの句から感 る。やがて雪は焚火を消してしまうだろう。 解けても降り続ける雪、その瞬間は壮絶であ 蘭幸 一焚火の中に降り続ける雪、解けても

> その眼は世の中のさまざまを見尽してきたか 雪のいのちの潔さ、哀しさをみつめている。 らこそ、「生きている雪」を思い遣るやさし く覚めた眼だった、とおもいます。 一焚火にあたたまりながら、

とも受け取れるが、 する。私は少し欲ばりかも知れない。 に"生きている"が抽象的すぎて惜しい気が 松風―生きている雪は人生の試練を詠んだ 柳太一雪と焚火のコントラストが良いだけ あまり句が飛躍したら読

ほとばしっている。 である。淡々と詠っているが、 蘭幸―上五の生きているがこの句のいのち 生への情熱が

者には解らない。

切り離せないと思います。雪の茶毘とも。そ 雪は生きているのです。「生きている雪」は 幸一雪の幽かないのちを見た作者にとって

> すが。考え過ぎでしょうか。 終りの美しさをも願っていると思いたいので して、生への情熱は勿論ですが、反面、生の

を増す反対性をとらえたと言えば作者の意図 えるには焚火では道具立が揃いすぎている感 も察しられますが、一般には少し難だと思う。 がある。ローソクが消える直前に急に明るさ 柳太一雪を人生のフィナーレのようにとら

罠仕掛けあるかも知れん吊橋よ

天 Œ Ŧ 梢

思想、すなわち体験であろうか 空間にはドラマがあり、そのドラマは作者の 松風―罠と吊橋の空間に危険が存在する。

と思う。 表わしているが、弱い。上五は罠だけでよい 蘭幸 吊橋を渡る時の不安な気持ちをよく

が、罠、吊橋と揃い過ぎた感じもします。 険してみたい気持がよく出ていると思います 知れん」と思い迷い、揺れ動き、ときには冒 幸 「あるかも知れん」けれど「ないかも

は不用。 感じさせる。もう少し内容に明るさがほしい。 松風―蘭幸氏の言われるように「仕掛け 柳太―現代の社会をみているような暗さを

薗幸―疑えばきりがない。人間の弱さであ

幸一深い谷間の闇の暗さでしょう。 関があるかも知れない。(だから)渡るのは止そうるかも知れない。(だから)渡るのは止そうるかも知れない。(だから)渡るのは止そうる、微妙な気持は出ていると思います。ころ、微妙な気持は出ていると思います。しそれにうち勝つ勇気と明るさが、この句にしそれにうち勝つ勇気と明るさが、この句にないのが残念だ。

苦労みな淡く点滅してるだけ

堀江芳子

★風―人生はみな喜怒哀楽のくり返しであり、その苦労も句集「二人三脚」で淡く点減り、その苦労も句集「二人三脚」で淡く点減り、その苦労も句集」

両幸─苦労を苦労としない母親の強さをこ
の句から感じた。回想句。

⇒ーいくつもの峠を越えて来て振り向いた をき、「淡く点滅してるだけ」と言いきれた とき、「淡く点滅してるだけ」と言いきれた

まり "アク』を抜きすぎたようだ。

直力は出るのだが、余情がない。 直力は出るのだが、余情がない。 道本一苦労みな、と言いきれるのは、いく である。ただ言いきってしまうと、句に にそである。ただ言いきってしまうと、句に にそである。ただ言いきってしまうと、句に にそである。ただ言いきってしまうと、句に にそである。ただ言いきってしまうと、句に にそである。ただ言いきってしまうと、句に にまれるのだが、余情がない。

幸─さまざまの苦労に採まれて丸くなって 最後の「だけ」は私も気になります。 最後の「だけ」は私も気になります。 柳太一暖かさのない達観は、ガラス人形を 柳太一暖かさのない達しなります。

廃車には惜しいブレーキだと思う

中川滋雀

刺だと私も同感ですが、ただ、定年だけに限幸―人間を追いつめる世の中の規定への諷

おかしいと思いませんか。

そのほうが生きてくるだろう。をのほうが生きてくるだろう。擬人法としてもすが良かったのではと思う。擬人法としても転がるかも知れない。『アクセル』としたほらないのでは?と思います。

松風―原句をそのままとしたら廃車の前に ではないような気がしてきた。もっといるのではないような気がしてきた。もっといるのではないような気がしてきた。もっといるのではないような気がしてきた。もっといるのではないような事を訴えている。

幸一車に限って考えれば、確かに柳太さんの言われるとおりでしょう。でも、人間におの替えた場合、廃車から想像して、相当の年配の筈?だとしたら、やっぱり自己制御の出配の筈?だとしたら、とも思えるのです。 柳太一私はむしろアクセルのよく働く元気 さのある人間をさして申したつもりでした。 ブレーキより、アクセルのほうが原動力だからだと思ったからです。

床飾り一歩も退かぬ鷹がいる

川端柳子

松風―この鷹は木彫か剝製か金属か解らなの。さぞお気に入りの立派な鷹と思われる。る。さぞお気に入りの立派な鷹と思われる。

■ 本一勝も退かぬ騰だから、この句もこの ・ 一歩も退かぬ騰だから、この句もこの ・ はな父の眼だ。 ・ であるユーモアも。

きびし過ぎて、むしろさびしい。どこかのより虎でも良かったのではと思う。 より虎でも良かったのではと思う。 一歩』とくれば鷹

松風―虎でも良いとすればこの句は動く句国の大臣さまのような鷹である。

蘭幸─幸さんの評に同調します。鷹は動か

からは、私は虎のほうが適していると思う。柳太-鷹というものは、鋭どさのなかに高れば、やはり、鷹の方が非凡だと思います。れば、やはり、鷹の方が非凡だと思います。

二人っきりいつも灯りをつけておく

神夏磯 道 子

★ できたいをしたのか、また新婚さんをしておく」だけでは内容が乏しい。 「対りをつかがしい。」

巣立っていった。また夫婦きりの生活になっ 蘭幸―子育ても終り、子供達は、それぞれ とも今の世では少なくなりましたが。 大文字でなくても金剛山でも富士山

つもが効いている。のである。ふっと夫がいなくなるようで。いなかったのが、この頃は、不安で仕方がないた。子供達がいると灯りを消してもなんとも

幸一二人っきりだから静かな明け暮れ、せ いて灯りだけはいつも消さず、暗い、淋しい のて灯りだけはいつも消さず、暗い、淋しい があり、前向きに明るく生 はておく」に救いがあり、前向きに明るく生

が消してゆく家庭がある。 どちらが面白いだ柳太―私の友人に灯をつけた夫の後から妻

松風一さびしいのでいつも灯をつけておくろうかと、ふと思ってみた。

衛を─午皆のやさしい気持が、よく出と言う人も居る。

蘭幸―作者のやさしい気持が、よく虫

幸―いつも灯りをつけておくのは部屋だけ を想像してみた。案外二人きりの生活人には を想像してみた。案外二人きりの生活人には を想像してみた。案外二人きりの生活人には を想像してみた。なりでする心象風景。

大文字の残雪寒きバスの窓

佐 野 白 水

味が乏しいし、推敲を願いたい。 松風―残雪の中で大文字を思いだしてバス

蘭幸─まとまっているが、どこか俳句的でです。鈍行で心ゆくまで旅に浸るということです。鈍行で心ゆくまで旅に浸るということがからせたない。

蘭幸―大文字の残雪に作者の思いがあるのな気がする。

だろうが、それが伝わってこないのは何故で

幸─送り火の大文字とは違う貌の大文字を ・ 送り火の大文字とは違う貌の大文字を ・ おの、得たものは貴重なはずですが、それが ・ はの、得たものは貴重なはずですが、それが ・ はいうことなのでしょうか。旅で見た ・ はいうことないでしょうか。 がで見た

柳太―バスの窓からみたという瞬間的なも のを素早くつかむ手法は買いますが、この作 のを素早くつかむ手法は買いますが、この作 のをまする。

橘 風 選

思い出す春を緑と赤に分け 僕の絵は妻の画く絵と同じはず 島根県 青森市 堀 藤 甲 IE. 古 朗

遠い日の主君を思う埴輪の目 釈迦は甘茶こちらは辛茶灌仏会 高棋市 H 崎 あき子

花よりも鳥よりも人人を愛で

ちょっと口説かれて軽うい約束を 埴輪の目この世の風がくぐり抜け 村 H

满

説法を聞く旅立ちをとどめまい 天寿の叔母に

泥つけて進むしかない蛇の腹 米子市 木

Ŧ

代

隠し絵にそれからあとの雪が積む 大阪市 出

智

7

子のいない部屋のステレオかけてみる 兎より愚かになってよく

眠る

独房のように刻んでいく秒針 ペテン師の指もそむけぬ孫の指 旭川市 朝 倉 大 柏

> 容赦なく日めくり女剝いでゆく 良く笑う女哀しい過去を負い

抱くことも負うことも無い軽い母

花菖蒲咲いて男のセレナーデ 八尾市 高 橋 47

夕焼けへ青い橋など架けてみよ 大阪市 藤 森

五月雨に一灯烟る知事公舎 マニキュアが少しお洒落な年にする

和歌山市 武

霊長の証溜息ついている 君子蘭咲かせて老妻も春の色

お説法深い水甕もって行く 大阪市 神夏磯 道

万人の祈りへ塔は傾かず

ゆめ色の木切れ集めて舟作る

夕ざくら和泉式部の影と行く 堺市 久 #

お祈りの心半分孫が取り おばあさん猫に涙をこぼしはる

受賞の日古いメガネをなぜ掛けぬ 待ち呆け背が噴水に冷えてくる 這うてくる力泣きべそにかわり 島根県 町田市

お地蔵様に黄色い旗とタンポポと 和歌山市 福 本 英

花

小雅子

雄

Ţ.

西宮市 林 は 0 絵

子.

村 早 苗

内 紫 錦

手紙ばなれ受ける切手も色気なし 楚岡市 遠

高知県 赤 111 菊 野

子 リヤカーで妻を送らんさくら道 ニコニコと言葉すくなにダイヤ婚 伊丹市 京都市 Ш

老いたかな柩の大きさなど言うて 本 谷 桐 寿

馬

T

海ゆかば山ゆかば中年宙ぶらりん 武 F 佐 帆 露 雀

見合するたびに出来てく理想像 大阪市 水 康 惠

花ぐもり美人が少しぼけて見え 校方市 久

塔の下立てば心は曲ってた 今治市 月 原 明

すぐ風邪をひくまじめなお父さん 灯を消して夫婦は別のこと思い 大阪市 水 健

米子市 pi 鶴

タイレクトメール破っても破っても

三味線草すこうし枯れて名に恥 殺屋川市 ず 英王子

薬びん溜って残り火消えていた 富田林市 美 代

宝塚市 笑 女

思い出の楽しい事のみ語り合う 島取県 路

逆縁の供華をたっぷり露に剪る 杖

喜寿過ぎて余生の鍵をかけ直し 高知県 F 答 舟

じれったく思う日もあり民主主義 勝 美

大阪市

岡山県 直 原 七面山	権の花咲くと授業力胆い午後		島根県榊原秀子	春や春隣りの犬に尾を振られ	島根県 堀 江 芳 子	頼りない政治を頼りに生きて居り	島根県木村はじめ	愛憎のしぶきがはねる泥の舟	堺市 大 道 美乙女	脇役に追いつめられて足挫く	和歌山市 西山 幸	熱帯魚飼って夫婦に子がいない	岸和田市 原 さよ子	春盛り鬱から噪へ病替え	富田林市 田 形 美 緒	麻痺の手から一つの詩がはじまりぬ	大阪市 津 山 刀 水	しばらくは家持と居る桃の下	和歌山市 浦 野 和 子	ほっとするとこに野仏置いてある	島根県 松 本 文 子	反省の涙を母の膝が吸い	米子市 政 岡 日枝子	この隙間なにを埋めよう春の風	富田林市 藤 田 泰 子		唐津市 浜 本 千 代	過去未来生命の樹を二本持つ	大阪市 川 口 弘 生	赤い涙になるやも知れぬ桜島	和歌山市 松 原 寿 子
かけひきでする手加減が気に入らず	5	育育市 與 谷 以 明	千の苦を腹に納めて日向ぼこ	兵庫県野々口ゆう也	盆栽の梅一輪に山も萌え	兵庫界 森 脇 和 子		界市 伏 見 茂 美		大阪市 坂 口 公 子	ひと欺す矢印細く尖ってる	京都市都倉水芽		羽曳野市 麻 野 幽 玄	11	高知県 曽我部 つぎお		富田林市 林 澄 子		大阪市 中 野 忠 広	す	浜田市 佐 々木 裕	いかなごの釘煮き春も真盛り	西宮市 奥 田 光 子		和泉市 岡 井 やすお	莫迦になり通せた日々よ落日よ	岡山県 嘉 数 兆代賀	春の雨次の出番に呼びかける	島根県福間芳枝	
吹田市西川景子		先っぽの祈れた物干し置いて越し	富山市 舟 渡 杏 花	ストの前ビラと駅員見くらべる		た遠い人	市高	3	兵庫県奥野テル		柳川市神崎紫泉		米子市 田 中 亜 労	,	京都市 山 本 規不風	む	大阪市	酒	東大阪市 米 田 喜一郎	12	要市 満 仲 きく子		鼎	て	大洲市 米 沢 暁 明	生けられる	米子市 菅 井 とも子		東大阪市 金 本 不二夫		東子市 小 山 悠 泉

	優	村	中	富田林市			初対面裏切り者はこの俺か
午前1(時から				一呼吸おいて点前のよい仕草	四郎	仁部	唐津市
新 表 6月27日(日) ラシオ第一放送	博友	道	岩	岡山県			中国の輸入陶土で有田焼
₹				栄転と単身赴任親も子も	朴竜	筒井	唐津市
	柳五郎	Ŀ	#	岡山市			嫁の手に旗あり時折そっと振る
投句先 大阪市東区馬場町3―43NHK			13	繰り返す反省日記に溜めて老い	いっつを	山根	大阪市
(ハガキに三句以内)	みど里	沢	寺	米子市			桜咲く頃除雪車動く北の国
稲切 6月10日				戦争を知らぬ世代の戦闘帽	綾珠	竹中	東大阪市
	武太	野	大	大阪市		ツたて	部下連れて馴染のママにメンツたて
課 題 鏡 選者 森中恵美子				亡母と来た峠の大樹孫と訪い	典	西岡	吹田市
1	美世	賀	雑			る	誰も皆生きるドラマの演技する
NHK川柳募集			草	野仏と話しているよに伸びた草	正之	稲岡	岡山県
	千春	H	沢	米子市		ľ	品名のわからぬ粗品だから欲し
				遠洋の積荷の旗に家族の目	春江	上鈴木	水戸市 上鈴木
	静江	Ш	j=7	高枧市	0	きる世	ありのまま言えぬところに生きる世の
橘高薫風 (ハガキに3			TO/	草餅の香りふるさとへ雲走る	小 村諷子	鈴木	鳥取県
投句先 〒60 豊中市桜塚三丁目13―15	きみえ	圖	Ti.	出雲市			面影をすてかね浴びる花吹雪
*				Gカード桜の花と散りそうな	柳子	川端	岡山市
気が遠くなる昆虫のルーツ聞く	花村	森	西	大阪市			新しい風を起して行く自信
今治市 新居田 胡顏子			1.80	失敗を素直に恥じて明日の糧	元江	松本	デース 間山県
残り火をかきたて春の夢描く	なみ	坂	野	米子市			凡人の目に玉子焼ピカソの絵
単和田市 古野 ひ で				碁会所にいつか集る粗大ゴミ	石 右 近	野呂	守口市
	潔	石	É	大阪市		6	春秋のドラマが村の史を綴る
浜田市 中川 幸 一			劇	身を捨てて浮ぶ頼もある離婚劇	不 桃 里	高木	笠岡市
	昌道	本	髙	今 治市		* /	小商い手に温もりし金を受け
東大阪市 市 場 没食子			大野	言い勝ったつもりの父へみな黙り	州 竹 萌	北川	高知市
いた	凡太郎	H	原	岡山市			若草に放尿男冥利かな
羽咋市三宅ろ亭		1)	掘	屋根の雪下ろすどころか家を掘	真風	谷	松山市
女の日	義美	本	浜	唐津市		ルー	さからえぬ風と悟ったアドバルーン
室口市 浜 口 秀 子				傷心の女の肩に触れたがる	坦花子	石垣	米子市
金は無し馬耳東風のGカード	正敏	保	久	唐津市		DCI	洗い髪すっかり乾いた長電話

ろ亭。

祝白岩文衛句集『出会い』の誕生/本田惠二朗

葉のかげで成虫となる身づくろい 文衛

四十年直球ばかり投げ続け

く固めたような人柄である。直球ばかり投彼は誠実と温厚とをまぜ合せて、ほどよ

ひなげしは蝶の重さを楽しんでさのあらわれと言うべきものであろう。

鈍才と知ってる一歩ずつ行こう 書家であり、文筆家でもある。 そして読 語め込んだ涙袋の持主でもある。 そして読

淡々と歩き続ける人である。あんたは鈍才脚を交互に、確実に前へ出して、あせらず意味の謙虚さを多分に持ち合せている。両彼は気取ったりぶったりはしない。よき

人はみなひとりで生きる鰯雲 していみは真珠の艶のしたたりか この坂を亡父も越したか鈴鳴らし 人生きる難さを思う夜の祝 し百合の白さ こころの紋とする はにかみは真珠の艶のしたたりか

なんかじゃないんだよと私は大声で叫ぼう。

これら一連の句は、彼が近年に到達した これら一連の句は、彼が近年に到達した

多くの柳友諸兄姉が、薫り豊かな彼の句集を願ってペンを置く。

心温い句集/土居耕花

手にして、私の嬉しくてたまらぬことは、出版された。インキの香も新しいこの本を畏友白岩文衛さんの句文集「出会い」が

その文も、全く文衛さんそのものであるここの本がすみからすみまで文衛さんの匂い

とである

さが、この句によって川柳へと触発されて 丸山弓削平先生の「上の子は足だけ母に触 いったのであろう。 れて寝る」の短冊だったとこの本の中に書 いておられる。文衛さんの生来の心の優し 文衛さんは、川柳との初めての出会いを

は詠いつづける 文衛さんは教師である。教師の哀歓を彼 牛の気に任せてからはよう歩き 競うほかすべなき馬に育てられ きつつきよお前はお山の鍵っ子か 三角波 どこで子魚遊ぶのか

叱らない教師を少女嫌いぬく 先生のひいき許せぬ少女の詩 おどけてる教師へ笑わぬ児がひとり 大好きな先生だから困らせる

雪だるまのような、ずっしりとして、ま 先生にどこか似ている雪だるま テトラポットお前も中間管理職 昨年の組はここらで笑いだし 先生のメモに暗号らしい文字 良心を少うし押さえて評定す

あるい先生、それが文衛さんである。その

こんなしみじみとしたのがあると思えば よいとこへ来たとそのまま走らされ さみしい日妻と明日を言うて寝る ジェット雲次男も谷を出るという 大晦日夕日をほめて叱られる

こんな軽い楽しい句も沢山見受けられる。 このごろは白い花咲く五十歳 うわさ愉しちょっと尾鰭をつけてやる 相談のあげく一人がドアを押し 人生きる難さを思う夜の硯

くる。

ませたい。

炎天にいつまで旗をふる父ぞ 煩悩の火種一つをもて余す ペンだこよせめてお前と語ろうか

い、こんな重厚な句がだんだん多くなって 終章に近づくにつれて川柳塔の匂いの濃

して私の知っている限りのすべての人に読 私は、この本を私の子にも、孫にも、そ まだなびく旗あり還暦おもしろし 定年を待つ定年の虹抱いて

力量の厚み/板尾岳人

はもっと大切である。どんな素晴らしい人 そしてその出会いに心をふるわす、その心 ぎてしまう。人と人の出会いは大切である くことなく、その人は自分のそばを通りす まっていたなら、その素晴らしさにも気付 の前にあらわれても、自分の心が死んでし 幸な人もいる。どんなに素晴らしい人が目 どうしても人を愛することのできない不

> 感受性を持ち、どんなにあふれるほどの愛 く、大切なことは、自分が心の中に豊かな と出合ったかということが問題なのではな るかということである。 情を人に対してそそぐだけの心を持ってい

自分の中に愛がなくては、人にも愛され 美しいひと美しい句を残し

中にも親しく若者をつつむ温容に接し、謹 俗な何彼が入り込む余地がない純粋の一語 に尽き、文衛氏の恰幅のある体軀に端厳の 柳がいのちと化した作品集であり、もう 正直、しかも真情の人という印象が深い。 文衛氏の人柄を反映する詩情のやさしき 大晦日夕日をほめて叱られる 四十年直球ばかり投げつづけ みの虫の安らぎ 老梅広い胸 石積めば夕日わが積む石に入る

目で飽くことなく眼の輝きを処処に見出し 度で句の価値づけをなし、文衛氏は確かな りがあったであろうが、句の表現法が古風 かないのちを得て定まる迄には苦しい道の 風をなして作品の紙背から立ち上がり、 であろうが新風であろうが中味の詩性の純 のびのびと呼吸している川柳が文芸的香 先生のひいき許せぬ少女の詩 叱られぬ子が多すぎる多すぎる かたつむりお前も向きを変えたのか 角欠けた豆腐でとうふ屋ひるにする 星降る夜地蔵散歩がしたくなる

> 天職と思うチョークの染みた服 雲の峰に書けばでっかい僕の句碑 夕やけが僕の涙を見てしまう 人憎むまいと思う雪を見ながら 石投げて少年きのうの傷を消す

な紗をかけているような一種の美的世界を 式をもって詠い得、そして何気ない日常の 絶えず燃え、その上澄みを巧みに川柳の形 しは、文衛川柳を創り出す渾沌の火が底に 構成しているように思えるのは言い過ぎだ 見聞、通りすがりの人びとの上に、きれい 句集「出会い」を読み終えた時、 わたく

も代表的作家であり、年輪のきらめきと累 独自な句風を創作した作者、常に敬慕して 加的に重厚を加え華麗な世界を開顕しつつ 冴えた感覚と美しい表現は川柳塔の中で 雑草と闘う妻の夏がくる 本読もう 今年は読もう なあ眼鏡

出会いから急な坂道苦にならず岳人

て血肉化させている

白岩文衛句集

『出会い』

その快挙へ私は惜しみなき拍手を進呈す れを子孫に残そうという意欲は美しい。 随筆とを集大成して世に問うと共に、そ 柳探求と人生体験とによって育成された 長年に亘って詠み残した句の数にと、 (本田恵二朗・序より)

■題簽・西尾 栞/装画・直原玉青

■B6判二百七十頁·函

■頒価 二千円 (送料共

白岩文衛

鉛筆をここで舐めてる母のふみ

〒707-04 岡山県英田都大原

■発行所 大原川柳社 〒707-04 岡山県英田都大原

井上ゆきお方

町古町一七一八

電話08684-2817

■本社でお取次ぎ致します。



筆談のペンから愛がにじみ出る

河

#

佑

ものである。 ことにより、ますます親しみも深まってくる 互いに気持を語り合い喜怒哀楽をぶつけ合う 人と人との交りは語り合うことより始まる。 竹内花代子

う中に、ほのぼのとした愛情が芽生えて、共 何かしら、ほのぼのと感じさせる句である。 に生きがいを感じ、今までと違った生き方が できる幸せを肌で感じている様子が目に見え ましてや筆談により、互いの気持を述べ合

病んでみて人の痛さに手が届き

を知っている人が良い。」と言われたのを聞い たことがある。 ある人が、「友達を選ぶのに自分と同じ痛さ 足立由美子

は理解できない。 健康な痛みを知らぬ人では、到底人の痛み その境遇になってこそはじめて、

> 痛さがわかる。 よく「人の痛さのわかる人になれ。」といわ

すばらしいと思った。 い。人権尊重の立場から当然のことである。 ついて率直な考えを句にまとめられたのは、 これは同情からくるものであってはならな 作者は、自ら病み人の痛さを知ったことに

耐えること雑草無言で教えてる

作者の心情が巧みに表現された句である。 と丹精の作物の間に容赦なく侵入する。 上ない厄介者といえる。 ぬくその根性の大切さを学ばねばならない。 人間は、もの言わぬ雑草に、何事にも耐え この雑草、踏まれようが引きちぎられよう 種を播いた覚えもないのに、少し油断する 憎らしげにさえ見える雑草に思いをはせた 土に親しんでいる人にとって、雑草はこの じっと耐え抜き葉を伸ばし生き続ける。

ロ下手が握る感謝の手の温み

握り合った手から、その気持が、ひしひしと とるものである。これがうまく句に表わされ 言のうちの温い握手から、相手の気持をくみ 伝わってくるのを感じることがある。 が全く感じられないという人がよくある。 いが、誠心誠意、感謝の気持をみなぎらせ、 人の感性は、うわっつらの美辞麗句より無 それにひきかえ、口ではうまく表現できな 世間には口先ばかりで、真実味に欠け誠意

憂さ晴らし聞いてるだけで喜ばれ

この人にとって胸につかえたものを全部はき 愚痴ひとつ言わずだまって聞いてくれる人が 出したい。これを聞いてもらうだけで嬉しい。 話さなければやり切れない気持になる。 ならない場面がよくある。どこかで思い切り いるのは何よりの友といえよう。 心おきなく話せる友がある人は幸せである 作者は、相手の気持をくみ取り、心ゆくま 人には言いたい事も言えずじっと耐えねば

がにじみ出たよい句だと考える 家中の苦労を背負ったような愚痴

る広い心の人だと思う。この句は、その人柄 で喋りなさいと相手の立場を考えて受け入れ

労が付きまとうのが常である。 あり、それぞれその分野で人にはわからぬ苦 一家を支えていくには、互いにその役割が

者の細かい観察力が、この句を生んだものだ くれないとつい愚痴をこぼす。 んなに苦しんでいるのに他の人は、わかって る。その苦労を自分ひとりが背負いこみ、 苦労のない家はないと言ってよかろうと考え これを、すかさずとらえて句にまとめた作 また、どの家庭でも内容は異っていようが

えて、違った角度から考えを深めきりこむ。 物事をじっと見つめ考える。また視点を変 これが何より大事と常に心掛けている

と考える。

あとになり身にしみてくる思いやり

きく子

学だが人一倍

0

思い

課

思 いやり

堀 江 芳 子 選

思い 思い U 幸せに やりのある人ならばと念を押す やり過ぎて やりもてば嫁ともうまくゆき ンわけは問わない思い 生きて小さな思い 噂に巻きこまれ やり 保 佳 路 道

思 思 1 10 やりある子が育つ母 やり父 の無 口が 胸を刺し の背な 多賀子 優

#

党

0

凡太郎

朗

七面山

病友 差し 思い

~

花しのばせておく便り

秀 洛 明

伸べた両手

が温

い思いやり

酔 朗

尿

0

やり親子対話の中に住

ti

思いやり持ちつ持たれつ古稀を過ぎ 思い 思い 思い 思いやりに慣れて甘えがひどくなる やり募金はそれを当てにする やり古傷などに触れませぬ やり老いの意固地では ね返し 倫 素身郎 水 3 富 亭 子 煙

此

H

党

H Ħ

気の

毒な話

^ _ _

乗せられ

3

芳

仙

か

P n

同

±

ぶつかる嫁姑

やすお 胡頹子

くその非を諭す思いやり

思いやり裏目となってつけこまれ

婦美子 伊津志

いやり受け継いでいる自在鉤

思いやりそれから愛が芽生えてた

車椅子みんな手を貸す思い 気疲れをほぐしてくれる妻がいる ただ泣いてあげるしかない思いやり 思いやりのある娘の方へ親も惚れ

やり

思 63

思いやり相手の立場に立ってみる

6

当たる れた席

部

屋 温みの

は嫁

の設計図 まだ残

久仁於

寿

進

思いやりのひとこと笑顔もどって来

文

子

党

男二次会

ふり 向

か

1 子

前 風

#

党の

通にもなって京の菓

喜

手をそえる歳を我が身に置き変える

U

と言がやさしく包む思いやり

IE.

武

思い

先輩

のシゴキこの

頃解りかけ

昭

すんなりと話題を変える思いやり

はつ絵

思

41

やり素

直

1=

受け

た涙です

春

H

#

酒

やり p 0 ばり

代仕男

#

党へ医者が気になる口をそえ

あ #

んみ

0

へ女飽きない

笑

Vi

声

芳

#

党

È

客で

酒

を控

之目

E

柳五郎

V

#

党を幹事にすえてけちられる

やり 子の背を信じきり 妻だなと思う

甘

道をひとつあけとく叱りよう

重

r)

にも

ひと役持たせとく

党

北 勝 美 選

コーヒーの香逃げ失せるほど角砂糖 の人が甘 党のお膳さみしい飯 党のそばをホステ 慢して癒りたかっ 党がする幹事会 党に去年 周忌家族 代目やっぱり甘党で継ぐ酒 党となっ で女も負けず手を叩 to 声 注意へ甘党聞 義 ろうろうと黒 党かと思う面 理 て父 でしるこ父し 0 酒 から 盃丸くう かい 0 た栗 まだ残 ス通り抜け あと始 項 3 が出 固 羊か がまえ H 0 消 E 節 末 17 1) 3 星 規不風 カズエ IF. 木 天子 柳 鱼 泉 路 柏 敏 子

路

集

H Ħ # # 甘 tt # # H H # # # # 党で 党 党 党 党 党 党 党 党 党 党 0 0 2 B かい 1 かべ 0 0 0 0 0) 視野 父 物 浮 社 侮 理 社 踊 孫 事 13 送 かい 足 111 長 解 3 女 n が 長 7 茶 別 0 7 6 0 C 夜 出 0 土 幹 せ 0 * 会 7 胃 82 盃 来 0 僧 間 湧 産 事 まさを指 3 H は 散手 て 敗 -か は ~ な 0 10 身 責 逃げてくる 弾 1+ 2 + 知 気 め 飲 離 ま を 酒 恵 酒 10 to L 6 80 摘 3 な < 0 3 n 0 使 2 0 3 n 3 妻 す 7 3 味 席 n 3 餅 あき子 右 婦美子 素身郎 胡 捷 星 51 類子 保 T. 近 朗

瓜

蘭

選

叩 誰 瓜 お 煮 11 瓜瓜 瓜 12 いて見 1 ス た 畑 抽 1 なじに 瓜 見 0 7 瓜 ス などと養子 7 足 わかっ 値 なら 3 戸 約 貰 跡 F 育 惑 路 えぬ げ 河 てた da たよう をす 2 7 店 童 子 7 花 胡 か 供 7 を 63 る に期 女 瓜 1 B 3 0 1111 西瓜買 漬 知 僕 知 1) 43 物 b 12 高 出 0 か 合 箸 す 1+ す す は 登美也 本蔭棒 51 道 t たった 朗子山

佳

Ш 手 瓜 瓢 10 ってるきゅうりにすなおさある心 Ŧi 鲻 伸び か 0 0 す 1 3 地 12 < 0 民 塩 す う 話 7 < 瓜 かく 瓜 育 0 詰 漬 ち b do おらかさ 母 7 年 0 あ 生. 味 3 胡頹 やす 枯 お 前

た娘 0 分 1 漬 17 瓜 0 樟 大

柏

漬け へ受けつぐ亡姑 0) 味 が生き

芳

7

13

違

う

恋

1

勝

美

魂 は 胡 瓜 0 個 性 ŧ 伸 ば

商

てみても茄子は

瓜

 \mathbb{H} 植

靴

0

10

えぬ

みつる

瓜

赤

福

7

お

昼

を

済

ま

+

伊

勢

0)

旅

1

羊

1

添

入

てや

n

Ħ

党

0

H

だ

か

b

信

う

道

J.

75°

尿

病

を

気

出

欄

6

す

瓜赤

3

な

都

0

鉢に見

#

瓜

1+

B

姑

直

伝 す

粕

0)

味

瓜

が

È

食

0

頃

11 市

首

1+

戦

3

綾

珠

鳥

う 漬

I)

i.

2

П

3 0)

童

唄

浪

たん雀

のお宿に上げ

規不風

通 事 L 党 C な 1 は 2 な 0 7 飲 ii か 好 h L 3 0 7 医 な古 アンコ た 者 VI 酒 L 0 增 逢 0 Us 1 掘 妻 10 12 3 件 本蔭棒 七面 四 重 春 郎 人 草 Ш 瓜 先 0 家 初 西 0) 瓜 4 庭 to 蔓手繰 んぼ 物 割 菜 1) 1) 南 0 0 गा 小 西 瓜 す 敷 童

3

II

を

H

眺

美 柳

II

生穗

す ~

2

b

1+

0

長

五郎

瓜

から

3

お盆

打 80

#

党

1

小

#

党

2

左

廿 Ħ

0) 0)

見

党

7

党 党 党

かい

歌

T

お

3

黒

 \mathbf{H} 2

節 +1

比呂志

あ 瓜 瓜 勾 殿 瓜 良 南 か

L

た又

取

る

瓜

0

数

17

る

苗 亭

しぶ

きと雲の 見とど

峰

どんたく 早

嫁

次

行 た

た昔

話 自

3 己

41 張 II

1

屋 F) 10 0

は K 似

0 0

真

中

ほ は

どに

お ま 主

3

3 不 様 0

ように

剝

くの

だまく

to

不

夫

U

で

蔓実の ひょう

つくまでを邪魔

がら にゆ

文

Ŧ.

 \mp

瓜

0)

持

0

た

昔

0

傷

を

か步数室

田恵二朗

下するに決っている る。もしもこばんだとするなれば作句力は低 ばかりか、大いに取組まねばならぬことであ るが、そのどちらも大切なことである。 釈しているからである。 いうこととは全く異質のことであると私は解 なかった。『裁く』ということと『選る』と いるのを読んだことがあるが、私は賛成出来 きことではない。こんな主張が活字にされて いと同様に、人の句を選をすることもなすべ 従って、そのどちらもこばんではならない 句を選ることに『自選』と『他選』とがあ

枝ぶりをほめてからのおつき合い 枝を曲げ首曲げ思案の盆栽師 丹精は枝もたわわの林檎園 (枝曲げて曲げて盆栽師の思案 (丹精がリンゴたわわに実らせる) 柳右子 ıŀ.

『人が人を裁くことはあるべきことではな

きれいな手花瓶の枝は撫でられる (壺の枝乙女の指に活かされる 枝ぶりを褒められてから和み合い) īī

キラメク短冊思いを託す花の枝 短冊を枝に結んで花顔にふれ 短冊を結ばれ小枝がはにかむよ

持たすものないが一と枝折ってやる (一と枝を持たす小さな礼ごころ (短冊に思いを託す花の枝

先生の一と枝お花が生きてくる (ホーホケキョへ今日も一と枝貸してやり と枝へプロの腕組み長過ぎる

離れたり寄ったり植木の枝をほめ (離れて見寄って見松の枝を褒め

戸惑いの鋏へ枝せせら笑い (カーブミラーへ伸びた枝葉は処刑され) 柳五郎

また聞きの話枝葉がついており 枝葉ばかりこだわり本題欠伸する (枝葉ばかりにこだわり本題どこ (戸惑いの鋏小枝にみくびられ へやら)

美

庭園師惜しいと思う枝も剪り (また聞きの話が枝葉繁らせる (丸坊主みたいに庭師枝を剪る

枝ぶりの良いのが花も人目引く 枝ぶりが花引き立たせ引き立たせ

元忘れ枝葉ばかりに力入れ

[1]

静

村諷子

鷲の今日も来そうで枝仰ぐ

(師匠さんが一と枝添えて壺が生き)

街路樹の枝信号へ伸び切られ 兼治郎

T 代

松の枝きれいに見せるおぼろ月 原点を忘れて枝葉ばかり言う

勝

美

伸び放題伸びた枝には実もつけず おぼろ月松ヶ枝南画にして見せる

花の宴枝の短冊見てくれず (花の酔い枝の短冊振り向かず 伸び放題の枝に実もなく花もない

茂

美

枝たわわ花の重みに雨が降る 枝豆の季節が来ればビール党 (枝たわわの花に無情な雨の音

みつる

枝伝い塀乗り越えて猫の恋 (枝豆の季節がビールの味を増す 枝伝い塀乗り越える恋もある

鋏君枝の痛みがわかるかい 本の小枝が初夏の風を呼ぶ 初夏の風小枝小枝が呼び寄せる

油

(花鋏よ小枝の悲鳴が聞こえるか 保

枝ぶりの盆栽他人が値をつける 枝ぶりをほめて上司へごあいきょう (枝ぶりを褒めほめ上司へごまをすり)

(盆栽の枝ぶり他人が値ぶみする 美智子

裸木の枝の願いは天を衝

おみくじを結ばれ枝が重たがる

(結ばれたみくじが重い枝の愚痴 芳 水

枝ぶりの佳さが独占欲誘う

盆栽の剪定叶い小枝張り

剪定の効き目小枝が張ってくる [ii]

兀 II

枝先の新芽に真珠の露を置

枝先の若葉真珠の露を抱く

越境の枝ばっさりと処刑され 利	(毎の支昔)てみの虫冬を或す)みの虫の繁る枝かげ冬を越し	(春嵐枝のけぞらせ花散らせ)	吹き降りの枝のけぞらせ花は散る 貞	(小枝とて見逃がせません選挙戦)	選挙戦枝さんまでも頼られる	(鳴いてみて一と枝飛んで鳴いてみる)	さえずりも楽しく小鳥の枝移り幸	(枝豆へあなた好みの塩加減)	枝豆へ主人好みの塩加減	(一本の枝を咥えて旅がらす)	枝一本咥えて鳥の旅つづく	(若枝は小鳥一羽を持て余し)	雀一羽やっと支える若木枝	(花散れば枝葉を賞でて酌み交し)	花散った桜枝振りほめられるや	(無駄枝を摘む行革という鋏)	行革は下枝払う努力かも	(耐えること鉢の小枝に教えられ)	盆栽の枝から忍を教えられ	(盆栽の枝春風にくすぐられ)	盆栽の枝の新芽に春がくる	心ない人に折られて泣く小枝山	(枝豆で灰汁抜き合うて抜き合うて)	枝豆で男同士が灰汁を捨て	盆栽の松の樹齢が枝に生き	(雨上り大枝小枝背伸びする)	枝いっぱい息吹き返す雨上り
美			子		[11]		子		同		水		司		すお		可		男		[ii]	久		ī	小雅子		īi
忠	(支ぶ)はどうちて真江の花をつけ) 枝ぶりはどうであろうと花は咲き 同	待ちぼうけ柳の枝が頬を撫で 凡太郎	枝ぶりを褒めてすんなり金を借り同	(エゴ人間松を片輪にして賞でる)	人間のエゴ松の片輪賞でている 昭 公	(枝払われ北山杉は伸びに伸び)	(枝払い払われ杉は天を衝く)	枝払われて北山杉は真すぐ伸び同	国会よ枝葉末節に手間取るな 瓢・	(小枝いま目白めおとにさいなまれ)	折れそうな小枝へ目白の夫婦連れ同	(枝ぶりをどう生かそうか庭師の目)	枝ぶりへ庭師腕組みしたまんま 英子	(邪魔枝が堂々芽吹いてあわてさせ)	邪魔になる枝が芽吹いて切りそこね 同	(垣根越し枝褒め合うて褒め合うて)	(枝ぶりを褒め合い垣根うまが合い)	枝ぶりをほめ合っている垣根越し 紀久子	(枝ぶりに祖父の丹精がにじんでる)	丹精の祖父の盆栽枝をほめ同	(小枝そっと折ってもみたい咲きっぷり)	小枝そっと折りたくなるよな花が咲き 千っ	(剪定の枝がみどりにもえ上り)	剪定の枝にもえ出る芽が青い同	枝払い育てた報い子にゆずる 風 立	(てっぺんの枝で首つる奴凧)	公園の枝に残骸さらす凧
広 ■6月の常任理事会は1日 (火)	(酔々記)	ついては了承。(史好氏報告)6月号に発表。	送して終局としたいとの好郷氏の申し出こ	「卯は、ベストテ	よ) 一目	★二百号記念大会央等報告替は目下各里中で		かます。 からは、 がは、 がれる。 がは、 がれる がは、 がれる がは、 がれる がれる がれる がれる がれる がれる がれる がれる がれる	□栞・薫風・紫香		川卯荅社常任理事会(5月1日)	*	T PHI 本田恵二朗	宛先 岡山県倉敷市下津井一―九―三四	題一幕 6月2日締切(8月号発表)		(大樹から分れた枝に見る貧富)	大樹から枝が別れて	(枝それぞれに個性ゆたかに曲り)	曲ってる枝には枝にある個性	(一と枝を見事生かした花鋏)	子 一と枝が見事に生きる華道展 寿 子	剪定する枝へたわわな柿の夢	酔興句枝に吊して花見酒同	童 大吉のみくじは枝の先を選り 胡頽子	見込まれた枝は気ままを許されず同	二夕股の枝でゴム銃拵えた日

集『夫婦酒』讃歌

重

銀婚記念に句集を作る、羨ましくも又嬉し 敏さんおめでとう、恭子さんおめでとう。 妻の指せめて真珠で飾りたい 耐えて来た土は緑の春を生み

も個性溢れる斬新な句集の出来栄えに編集の 腕と夫人への讃歌で巻頭を飾った配慮、 人の喜びも一入のものであろう。 につきる夫婦の金字塔で、それだけに又おこ 敏氏そのものをかくも見事に引き出した手

頃の共稼ぎは大変であったと思う。 そ笑って済ませられるものの娘さんの小さい 夫人のおぼえがきにもあるように、今でこ 耐えること知って夫婦の味が出る 衣食住帯に短かい共稼ぎ

当時同じ市電の公舎で子供を保育園に送迎

である。

てある。

句集

"夫婦酒" 鑑賞を乞うこと切なるもの

いるのだとぬけぬけと言い切れる敏氏は幸福

しかもそんな活動的な所が妻の信頼を得て

祝辞ふと真珠の涙見てしまい

も深甚の敬意を表したい。

労に当られた香川酔々氏に敏氏の友人として

支えられる幸せも敏氏夫妻の人柄であろう。 又こよなく愛する妻と娘と多くの友人知己に 談論風発、酒を愛し家族を愛し、 信じ合う無言の友の手が温い 俺と云う荷物を持って妻老い 地下鉄の初荷大事なお客様 裸で話そうとは自信のある男 妻と娘がもうよしなさい酒の量 都二府三県寄せて母の古稀 その彼を

保革逆転時代の波がうねり出し 七人の敵を求めて朝の駅 大阪に惚れてとうとう家も建て 票の重味当選かみしめる 事費に使ってくれるな僕の金

しかも題簽が夫人という作家冥利

服の他はない。 する。そんな中で川柳活動も人一倍活潑で敬 行動力は群を抜いている。 る彼は筋金入りの闘士として、 特に選挙ともなればその多忙さは想像を絶 職場を愛し大阪を愛し、しかも知る人ぞ知 いそがしい仕事いそがしい男に頼み その組織力と

会

句集 燎 原 発刊川柳大会

ーで保育園長の祝辞に涙した夫妻を見た時は する姿を知っているだけに句集出版パーティ

目頭が熱くなった。

尼崎市立労働福祉会館Fホール 6月20日 (日 11時開場

阪急塚口・阪神尼崎より尼崎市

場

日

はなし 中村東角·篠原双人·福島郁 助川助六·時実新子·北川絢一朗 バスで労働福祉会館前下車

兼題と選者

橘高

薫風

森中恵美子 小松原爽介

走る

喝采

ドラマ

絵

自由吟 各題締切午後1時・秀句に呈賞 席題なし・投句拝辞・各題2句 田中

句集定価 五百円(句会報呈 二千円(購読申込みのとき 郵送費三〇〇円

二千円(句会後五時より)

〒60尼崎市今福中ノ町一七八 燎原句集刊行会

伊東静夢方

電話〇六一四八一一九一九六

定金

冬

柳 展 望

原稿締切毎月末

集録·香川酔

出版祝賀川柳大会が、5月 ■白岩文衛句集「出会い 開催される。 川柳大会が、左記の要領で ■津山市芸術祭第4回津山 念川柳大会が、 の参加を見た。 阪青少年会館で開催。 つ加わった。 新しい力が

ところ・津山市大手町5の 午後4時30分閉会 午前10時30分開場 とき・昭和5年6月6日 会費·千円(作品発表誌呈 当日席題なし 美作教育会館大ホール

3日、大原総合センターに

おいて盛大に開催。

本社よ

氏の句集発刊を祝福した。 名の同人が参加して、 り栞・薫風氏をはじめ十数

本翠公氏)では3周年記念 ■大東市民川柳会(会長山

5月23日開催、

兼題と選者 「カード」 たたかい 欠席投句拝辞 各題特選3句に呈賞 各題2句・2時30分〆切 長町 木野 由紀子 愛鄉 青山

主幹代行が、兼題

選に当たられた。

神古梅句碑10年句碑まつり ■生駒番傘創立5周年·大

が5月30日盛大に開催され

■昭和川柳クラブの発会記 4月29日大 70名 主催・津山市教育委員会 片山雲雀追悼号とされた。 会うてくる て、「久しぶり年のまるみに ■川柳いずも56年度賞とし ・川柳瓦版では、 琲 堀江芳子」を 4月号を

平和論
ぽとりと音のする
涙 選出した。 爪を切る 山敏子。 れほどの価値夕陽みる 千島鉄男。今日を生きたど して、次の作品を発表した。 ■「川柳公論」80年度賞と 堂々と闇に坐って 山本忠次郎

難民に靴跡のない 発表した。 賞作品として、次の作品を ・川柳研究社では、 56年度

ことをありがたく厚く御礼申上げます

寛哉 酔々 一 なお同社の第12回誌上全 の皿に手負いの母眠る トンネルに溢れる予想屋の 川妻魔多児。 ■川柳路吟社56年年度賞は 川柳大会は、 日蛙太郎。 須田尚美。 課題 イソップ

市福祉センターで開催。

川柳大会は、

5月9日神戸

j

■第14回東洋樹川柳賞贈呈

お

詫

U

去る二月に最終の昭和五十六年度大萬川

和五十六年度大萬川柳ベストテン表彰として左就では子て「川柳塔」に発表された如く、昭 記各位へせめて粗品をお送りさせて頂きます すが相談の結果、 ご期待下さった皆様に申訳けなく、また残念で ながらいつ迄も開会を延引することは許されず、 まことに勝手ながらお詫び申します。 めた次第です。どうか御了承下さいませ。 事万端行事は不可能の様子でございます。然し が病状遅々として全快にならず、現在は到底諸 会開催を予定でございました。ところが去年十 月に突然、私脳血栓に侵され病床に臥しまし 永い年月、 幸い軽症にて次第に快くなりつつあります 大萬川柳にご愛顧ご協力下さっ 大会を中止断念することに決

昭和56年度

ベスト

テン表彰 (敬称略)

花梢準梅里賞

美幸

寿子·

于代

好一

秋女

雄々敢開賞

武雄敢開賞

三梅里賞

藤井 2. 藤岡

3. 4.

大萬

JII

柳

会

III

村

好

郎

河野 松岡 大路 松原

八木 8. 飛田 9.

川崎 神夏磯道子 小西

10. 12. 若宮

18 × 4 出句料 山村祐、 分を呈す。 6ヵ月分、 六人共選 雨宮八重夫、小松原爽介、 越郷黙朗、中林瞭象 カ年分、 千円 (路3カ月分 の句箋無記名 一位迄楯、 同一句を提出 30位迄同4ヵ月 10位迄同 五位迄

れる。著者は作句のほかに 締切り 傘で川柳一途に作句。水府 著者は、 の信頼を得ていたとかいわ ■北原晴夫著「哀歓抄」 7212 出句先了20小田原市 柳詩集 若い頃は詩人でもあった 詩筆を折って後番 7月20日 が発刊された。 水華

> 好評を得た文筆家でもある 辞典」などの著書を出して こむすき間 よろめきのドラマが忍び 人情の薄ささながら皿の 六月六日発刊する >同人・柳友消息

序文に岸本吟一氏が寄せ 方円の器に水の没個性 を祈る。

魂とが凝結した、銘うって となっている。確かな伝統 歴書。とも云うべき作品集 しい一巻となっている」と 川柳の心と、 "川柳詩集" の名にふさわ 青春時代の詩

書いている。 ・汐風川柳社では、 泉書房・ 三頁。 (上製布装ビニールカバー 価一、八〇〇円 沙風創

「ことわざ博物誌」「人間の

刊四百号記念として、 (参加者三百二名)を 合同

のこと。一日も早いご全快 時の足の負傷で入院加療中 ▼長野文庫氏 (今治市) 不

ら、編集長および編集部 お礼申し上げます。 お便りをいただいた。厚く 会を祝して、左記の方々か ▼二百号記念川柳大会の盛

ているが、本書は「その人

その人生の、

水・川村好郎・山内静水・ 水粉千翁・岸本吟一・園山 田久美·石垣花子·越智一 傍島静馬·尼緑之助·窪 ネーム。

多賀子・八木千代・芦田静 西川善紫·藤井明朗·山口 江·竹中綾珠·石垣花子· 内芝登志代・中村ゆきを・

職され、 ▽句会案内

タクシー、 境内)近鉄八尾駅下車 場所·西郷会館(八尾神社 ■菜の花句会 兼題=勇気、見る、荷物、 時・6月10日(木)夕6時 大阪風景。

場所・寺田町裏駅東南、 時・6月20日(日)夕6時 ■南大阪川柳会

松会館 兼題=中味、 苦手、糠喜び、

▼辻圭水氏(堺市)は三百 一日付で南海電鉄を定年退 (06) 343: 三八 引きつづき阪堺電

気軌道に勤務されている。

時·6月17日 南海川柳部

下食堂 場所・南海会館本社ビル地 兼題=神話、 木 夕6時

時・6月21日~22日 ■駒つなぎ川柳会

場所未定・詳細は後日。 ピーチ、天候。 兼題=うぬぼれ、 7

忘れる。 兼題=叱る、 場所・東大阪中央公民館 時・6月26日(土)夕6時 ■東大阪川柳同好会

新 同 人 紹 介

Щ ーふみ・満津子・弘生・薫風推薦 テ ル 111

佐

設のNHK大阪文化センタ

の川柳講座の講師を担当

合せは大阪駅前第4ビル24 五月二十日から開講 堀江芳子・井上柳五郎 子・河村日満・堀江正朗 美穂・若宮武雄・本間満津

▼橘高薫風氏は、

この度新

·独仙·栞·薫風推薦

塩満敏句集「夫婦酒」出版記念句会

57年5月7日午後6時・金属会館

あたたまる風景である。 ける敏さん。出版記念句会のいつもながら心 か。その人柄と交友関係の広さが偲ばれる。 も紹介された。既に残部僅少で嬉しい悲鳴と 酒」は三月下旬に本が出来、大阪の夕刊紙に かく情熱の人、行動の人である。句集「夫婦 語ったことが今も印象強く残っている。とに 生れの川柳作家よ大同団結せよ!と熱っぽく 杯のんだことがある。その時、 の近くの中華料理屋で岳人氏を交え三人で一 ない。ただ昨年秋頃だったか、 恭子夫人と並んで受付に立たれ、お祝いを受 句会は56年度各地柳壇賞の授賞でスタート。 満敏さんとは残念ながら深いつき合いは 敏さんは昭和 川柳塔事務所

栞副主幹欠席のため薫風編集長から狭間希久 へ賞が贈られた。

思いやりの中に、二十五年の歳月が流れた、 そうであるまい。お互いに気持をくみ合い、 たかさに触れ、敏さんは亭王関白に見えて、 萬萬的氏のおはなしも「夫婦酒」のあた

> を向くと大和一帯が湖の底に沈むと伝えられ 今は西南の方向を向いているが、 養のため碑を立てた。それが亀石だという。 死んでしまった。村の人たちが死んだ亀の供 麻に取られ、そのため湖が干上って亀が全部 主は鯰。 間に喧嘩が起った。当麻の主は蛇で、川原の 国が湖であったころ、対岸の当麻と川原との 面白い伝説がある。例えば亀石。昔、 に造られたか未だに分らないが、 鬼のまないた等々。これら石造物は何のため 残っている。酒船石、 話へ移る。飛鳥には不思議な巨石がたくさん い幾つかの句を紹介された。 そんな、なごやかなご家庭と思う、 はなしは、ここから川柳を離れ、 いる、とか。 喧嘩は川原の方が負けて湖の水を当 亀石、猿石、 この石が西 それぞれに 鬼の雪隠 と印 象深

電ありがとう。 局関係の柳友。 兼席題の選者は敏さんゆかりの 初出席は高田律子(八尾)、 堀江正朗・芳子ご夫妻から祝 大阪市交通

> 五月の月間賞は墨作二郎氏が獲得。 (和泉)西村かすみ 受付-与呂志・重人 (尼崎 (史好) の諸氏。

作二郎・射月芳・頂留子・智子・古都路・英 鎮彦・柳伸・酔々・寿子・史好・岳人 水・綾珠・千万子・三十四・はつ絵・文秋・ 近・白水・潮花・あいき・武雄・喜一郎・形 蕉露・喜風・育圓・敏・千代三・太茂津・右 水客・瓢太・勝美・紫香・かすみ・律子・富 寿美子・洋敏・薫風・雀踊子・萬的・恒明・ 呂志・山久・喜酔・規不風・登志代・翠光・ 英子・春江・胡村・九平・健司・柳宏子・比 壬子・涼一・凡九郎・庸佑・吐来・一二三・ 楽・文衛・武太・洛酔・三男・重人・雅風・ 子・冬葉・春蘭・満津子・道子・希久志・楓 出席―与呂志・鬼遊・泰子・川狂子・滋雀・ 進行—柳宏子、記録—鎮彦·健司

斉藤 三十四

姿見に丸い背中を伸ばされる 同行二人祈る姿に嘘はない 善人の後姿を騙せない 無学だが父の姿にある温み シルエットだけでもわかる好きな人 膳に乗り箸つけさせぬ姿焼き 献血の若い姿がたのもしい 自画像の父の姿に僕がいる 恋知ったうしろ姿に女見る 札束を積めば崩れてゆく姿勢 逆転の満塁ホーマー晴姿 いつ来ても山の姿に救われる 武文律 律かすみ 射月芳 射月芳 太秋 圓

あかね雲太古の姿今もあ 結局は影しか仲間のない姿 妻に似た後姿はもう大人 双生児うしろ姿で呼び違 出世して姿大きく里帰り お遍路の神を信じる良い姿 姿見の中で女は歳を取る 泰然と醜さ知らぬガマ蛙 立ち姿舞妓しばらく写される 貴婦人が意外な姿の俄雨 一人並んで引立役というてみる 重来うしろ姿は負けていず 町後姿になる蛇の目

> 凡九郎客 あいき 進んでる積りで今日の万華鏡 そのときをスタートとして前 夢だけに終って話進まな 迷いからさめると進むお人好し 真直ぐに進めば花の園が見え わが道を進めば強い風当り ここからはひとり歩きである進路 の進むしかない向 V. 風

凉登潮

正確に三分進む時計もつ 軍鑑マーチが鳴るとやっぱり進む旗 一歩づつ進む男でふり向かぬ

進歩する男の汗は真珠色 ちぐはぐに進む父には距離をおく ドン・キホーテが進むと青い風車鳴る

故郷の味もなつかし姿鮓

柳宏子

健

千万子 胡

警官の姿をさがす赤信号

X)

はつ絵

寿美子

仲人の話が進む舞台裏 進まねば後がいっぱいつかえてる 気のついた時進みすぎていたラッ 待ちぼうけゆっくり進む花時計 進むのに邪魔な噂が付いて来る 台風の進路で母がひとり住む 15

射月芳

柳宏子

与呂志

夫婦酒あの頃爪に火を点し

1

桃の節句の夫婦

泥んこの過去もなつかし夫婦

雀踊子

晴姿嫁がせる娘がおしくなり

一心に祈れば姿を見せる神 晴姿賞状づける車椅子 肩落すうしろ姿に矢は射れ

射月芳

あいき

雀踊子

楽

振り向けば振り向く人で恋進む 定年の父は進めともつ言わぬ 後進に道を開けたら花 進め進め家族の歩調揃ってる 善人が進めば邪魔な線を引く つり橋で進むしかない後が来る D ボットが進軍ラッパ吹き鳴らす 八進 むと孤独感を持つ が見え

> 与呂志 千万子

置 重 人 選 衛

雑兵が進

す技は知らない歩が進 むたんぽぽ飛んでくる

千代三

夫婦酒村田英雄にほめられて

夫婦酒」歌って妻へゴマを擦り

道鎮

妻と汲む酒に筧の音がある

八唱婦唱酒の肴になる句

の乗った木馬太郎は進めない

進ませる時計も古りて母達者

席題

進む

玉

耕耘機の父の姿は上機嫌

三十

ある時は神の姿になる乳房 ケロイドの姿晒している悲願 風釆で人のこころは計れるか 霊峰の姿神代のまんま生き 黒枠に母の姿がまだ生きる 家元の姿勢くずれぬ茶筅持つ 名優の姿へ舞台小さくなる 頂点で自分の姿見失なう

重武涼武喜

満津子 つ絵楽明

塩

満

敏氏より

句集「夫婦酒」出版記念として

金

封

登志代

一寄附いただきました

柳

社

育作圓郎 鎮育

りが下手で一

重恒

人明

ひとすじに 進 む 明日 明日が が拓けそう

満

敏

旅の宿でフルムーンの夫婦 惣菜の一品をアテに夫婦 夫婦酒三代揃った渡り初め夫婦酒こくあり実あり味深し 片付けは明日にしますと妻も酔 夫婦酒地図で子の旅追いながら 夫婦酒このごろ妻が太りぎみ 主導権妻に従う大ジョッ 夫婦酒窓は小雪になってい 夫婦酒ともに白髪の朽ちるまで 13 雀踊子

太茂津

水

紫喜泰

香酔

かすみ衛 柳宏子 千万子

酒 静 頂留子 本蔭棒 どんたく 馬

四分六の六分が妻で夫婦酒 同床異夢せめて飲もうよ夫婦酒 夫婦酒子供も孫も寄っといで 妻は大私は中で干すジョッキ 灘五郷杜氏も負ける夫婦酒 おいと呼びあなたとかえす夫婦酒 夫婦して酌めば二級も特級に 枝豆があればこと足る夫婦酒 夫婦酒キンピラ午蒡がうまい膳 銀婚を迎えて嬉し夫婦酒 夫婦酒遠いいくさを遠くする 夫婦酒「この浦舟に」で飲んだきり カラオケはこれしか知らぬ夫婦酒 かあちゃんにまだほれている夫婦酒 木銅銀金へ歩みの夫婦酒 ポックリ寺の話は老いた夫婦酒 みんな嫁き風の音聞く夫婦酒 ハネムーンどこ迄行った夫婦 子宝にまだ恵まれぬ夫婦 石女と慰め合って夫婦酒 酒

> 英壬子 射月芳 比呂志 作二郎

> > 夫婦酒人の情で酔うてくる 夫婦酒世界は二人のために在る 核反対話題を肴に夫婦 夫婦酒人の情けが滲みてくる へ夢は一つの夫婦酒

英壬子

雅柳九

岡 洛

泣くところ持たぬ女は強く生き 男より強い女で平和です 父の汗心に強く刻まれる 六法に強い男のうす笑い 強いこと言える間は酔うて いる

孤になれて強いおんなになってい 強そうな鬼の背中にある本音 いる

平手打ち強い絆がほとばしり 善人の強い怒りは肚の底 強い者勝つと限らぬペン冴える

比呂志

蕉白善

春 楓 健 三 一 蘭 楽 司 四

監督の強気裏目に出るときも 強がりをやめたら急に老けこんで 背なの荷を下ろすと母は弱くなる 冗談が強くて敵意みえてくる やがてくずれる積木を強気で積む若さ

岳吐寿美 人来子

愛という強い味方のいる夫婦 切り札を女が持ってるから強い 強がりを言う人生の白い髪 強いのがいるので間隔開けておく 出世街道強い日射の中を行く ひとすじの愛をぬくめて寡婦強し 千九楓涼春春萬寿富勝 万 子平楽一江江的子子羊 雀踊子 与呂志 風

武水楓道 客樂子

を抱く

雀踊子

善意の芽伸ばすと強い輪となろう 鉛筆の芯が強くて嘘書け 銭亀が渚へ強い歩を運ぶ 帯強く締めサヨナラを言 平凡な女に母の貌がある 雑草の女で強い紐を持つ 割れるほど握るコップは悔し 強すぎる絆どこかで断ちたい日 強い石捨てて片隅とる手段 強がりを言う横顔が青臭し 強くぶつ父が悲しい顔になる いこと言うて淋し

10

か

規不風 太茂津 千万子 比呂志

U

にゆく

涼

強い背に男は耐える辞書を置 雑草の強さは土と陽を信じ かたつむり一 判おした紙の強さを知る落目 歩一歩の強い意志

生きのびる強さをドヤにも月が満ち 来人雄雀彦

児島 与呂志

さり気なく粧い兜の内に秘 床の甲胄もろとも料亭代替り 片言で兜を脱がす孫の知恵

本磁棒

狭間希久志氏より 年度各地柳壇賞受賞記念として 封

拝受いたしました。

柳

社

孫がいて子がいて祝いの夫婦酒 夫婦酒愛してるよが口を突く 祝い酒夫婦ともども思がある 夫婦酒はずむ子のこと孫のこと 夫婦酒の死角へ回る走馬灯 夫婦酒揃って朝まで寝てしまい 夫婦酒港の古い時計聞く 悪縁もここまで来たか夫婦酒 美しい星座を見てる夫婦酒 九官鳥今日は鳴かない夫婦酒 嘘ひとつ沈めて交わす夫婦酒

あいき

回り椅子俺より強いことを言う

いことおまへん昨日も負けました

強がりの挫折小さな旅に出る

規不風 作 紫 香 千代三

初孫 乱世をくぐってかぶとに隙がなし 親がいちばん喜んでいる兜 保育所の兜疲れた母が来る 新聞紙兜に折って子供の日 金色で丁寧に折る紙兜 初孫の飾り兜は祖母が買い 兜ぬぐふりして裏のうらを読む わが子には兜をきせぬ初節句 初節句兜は飾るだけがよい 新聞の兜海から風が来る 兜の緒締めれば勇気湧いてくる 影武者の兜は玉虫色になる 兜の緒締める間のない世界地図 紙兜男はチャンバラ大好きよ 兜の緒〆めて余生をまだやる気 兜脱ぐまでは聞く耳持っていず 全快を励ます兜父が折る 紙の兜がころがっている子が眠り 衆愚集めて兜を脱いだことにする 先生と同じ兜が折れず泣く 戦さには行くな新聞紙の兜 ンションで旗を振ってる紙兜 って締める兜が欲 者兜ひとり息子は病気勝 兜冠むれば刀差したがり K兜はテレビの上で住 へ無理 いでも負け惜しみ言うて 一
唯に負けて泣き戻る 旗手は兜を欲しがらぬ いしておしっこの した兜惜しくなり 5 紙 兜 浪なり 2 いる

> 翠 \equiv

> > 影武者のかぶらととこれの母の紐少しゆるめて花の寺 踏み外す前に兜は脱いでい 女系家族兜大事にだいじに

大 坂 形 水 選

軽口と軽口 ライバル

信じるものがある まず軽口のジャブを出

^

南京豆の皮が増え

を叩くと揺れる縄梯子

で女心をつ 口 つか

の中に教訓秘めてある

地買ったはなし軽口へ乗せておく

道

前じの軽口が出て会議済む をたたき看護婦注射打ち

太水庸寿寿智紫作喜九白恒 茂 津客佑子子子香郎酔平水明

口軽い男で世間を狭く住み 軽口が団欒の座を白けさせ 軽口が過ぎると神がたしなめる 軽口が過ぎると神がたしなめる 軽口が不治を紛らす見舞客 軽口がたくと料理をよく出来る 好調の父の軽口よう弾み 軽口を言わなくなった元課長 軽口が出て回復のきざしみる 子とデートきょう母さんも軽い口 軽 一でピンチなんとか切りぬける

律 寿 柳 宏子

三十四

軽軽労 をたたくと料理をよく出来る

善作登志代 常代

軽目 覚しから 人警官には通用しない 口にもエ 使共軽口が出てスト中止 で大事なアイデア盗まれる にすこし妬心の匂いあり 1) 軽口が出るタイミング ート知性をひけらかし 軽口

婦

英潮寿鬼満津子花子遊子

与 呂志 富智道

軽

術室待つ軽口が涸れてくる

を叩きあってる含み針

規称 滋不 風伸 雀

から

触れてるのに気付き

П П

0

男目玉がよく動き

口を叩くと紅がはげてくる

千代三

満津子 郎 馬露 的 軽口 軽口 軽 軽 軽 軽 スイートピーは軽口上へ上へ咲 満天の星に軽口悔いている を越え軽口も出る快復期 を淋し を侮辱している水枕 0 も叩かぬ父でノミを研 一つが雲を呼んでくる い風の中で言う

病室にいても軽口衰えず 牡丹寺母に軽口言うてみる

幸涼静蕉

5月号の訂正

柳宏子

敏

☆123 P兼題 ☆72P誌上句 ☆INP誌上句集、 ☆122 P 兼題 (世)豆の蔓すでにわたしは置き去りに草の芽が伸びると戦さ始まりぬ 雲の筝 P誌上句集、西尾栞氏の句散らばれば白も醜いごはん粒 一日がこんなに静か妻の留守 伸びる 集、北勝美氏の句 越智水軍の島を指

春健泰鬼紫文春健

司子遊香衛江司

田岳 鶴子 美

千年の夢みて塔は風に

千醉岳弘 代 三々人生 射月芳 形作二はつ絵水郎三絵 射月芳 萬 重

68

十七字以内の句に、 ■原稿用紙を使用。締切毎月末着便まで。 下三マスに雅号。

整理・香川酔々)

幸せな音がわが家を通り抜け いくしま川 黒川 ツエ

散ったのか散らされたのか桃の花 腹心の部下が多くて影動く 欲ばってみたが結局捨てる羽目 飛行機が飛んでる無事に着くやろか あちこちで深い穴掘るショベルカー 約束の堅い男で出世せず 幸せの真只中にいる寝顔 ひとり旅雨には雨の日のプラン いい人と飲んで別れた夜の風 花の鉢買うて部屋中春にする 約束の燃え滓を持つ老夫婦 細腕にローンの重さがのしかかり 口約束軽い気持が罪作る 紫か保幸貞香み蔵子子 美智子 3

> すがる気はさらさらにない針の穴 すがり合う夫婦に坂は苦にならず すがられるうちは花だと思ってる すがる手のぬくさが鬼になり切れ 金にだけすがり心は飢えている 神様を思案させてる娘が一人 みの虫が思案している戻り冬 目を入れてからのダルマが思案する 誰ひとり傷をつけたくない思案 公園の椅子に差別のない温味 差を縮めようとするから蹴つまずく 生き方の違いで差などつけられぬ 追う者の強味じっくり差をちぢめ 棒グラフ差だけカガトがちびている 寸した差だと思っている努力

> > H

先輩と呼ばれて割勘とも言えず ぜんざいの味先輩に教えられ 先輩より少うし安いタイを買う サラ金にすがると罠が待ちうける 神仏にすがって欲は持っている すがられて見てから自分が少し見え 凡九郎 あいき 喜柳 節重久 滋楓弘、 伸 風

上げ底でよし友情を温める ひび割れが夫婦茶碗の底にある 底辺を這う人生の父でよし 底なしの井戸をのぞいた自昼夢 どん底をささえる妻の手が荒れる 爪をかくして先輩の影をふむ 11 頂留子 小雅子 公健静酔 雀踊子 千文 梢

暖かい微風のような人である 丸い字であんぷくとあり木賃宿

一豊の妻に残った空通帖

春の欲花屋で花を嗅いでいる

牧晃

南大阪川柳会

中川

朝焼けへ男戦さの靴を履 たこ焼にビールがうまい日 耐えるだけ耐えて窓ぎわ族になる 顔一つ変えずに耐える事に慣れ 新人と思えぬ度胸で期待させ 曜日

留子

根性を見せて動かぬノド仏 根性は親の生きざま見て育ち 独学がついに実った日の笑い 堤防の枯草焼いて春を待ち 生を借家住まいかスルメ焼く

腕前を釘一本に逆われ 腕前を褒めてへんこつ作りあげ あなどった方が雪隠づめにあう 生まれた時が悪かったんだ腕前よ 夜店の鰻釣りなら負けぬ河内弁 骨接の指も並んで仕事する 根性の男は一歩ずつ歩く 末席の一人反対しつづける

腕前はギネスブックに遠く ぬうっと来て宿屋助けた甚五郎 幸福にうすい女の腕がたち 出稼ぎの腕雪解けを待って呼ぶ 辻斬りを見事と思う石地蔵 腕前を過信コーヒー飲みに行く 大小屋にパパの腕前見直され 甚五郎の鯉には猫もだまされる 変人でも通る腕前持つ大工 民芸は無名の人の腕を買う 良いスポンサーに恵まれていた名人芸 いる

米びつの底に女の数え唄

先輩の悪いところも解りかけ

恵美子柳右子 雀踊子 千代三 柳信恒 柳宏子 射月 美乙女 重 凡九郎 遊 秋信 司路 蘭好惠平 治明

底入れを頼む男の下心 駒つなぎ川柳会

里

腕前はこんな程度の玉子焼 腕前を褒めて馳走にあずかる気

咲かせては人にあげたい趣味を持ち 腕前を天眼鏡で見せて かちな人ばかりいる三分咲き 4

春雷に驚いて咲く沈丁花 咲ききった花は孤独な貌になる 人生の坂乗り越えて来たゆとり 山にきておにぎり素直にころぶ坂 あじさいよ約束ごとはせぬように 里の春柚子の木に柚子はなし 女坂胸に秘めたる意地があり 楽しく暮らすことを考える老いの坂 約束の時間が過ぎた伝言板 約束をたがえぬ男で痩せている 雑草は我が人生の縮図なり 築城の苦労を偲び坂に佇つ 下り坂女の夢は捨てきれず 人の目に触れることなく山桜 恵美代 千寿子 君 いくの

孫連れてうぐいすの声かみしめる みちのくのうぐいすしばし足を止め 厄神の帰りの事故をいうて泣き 厄年の一年早く暮れて欲し 母となる日へはずんでる毛糸玉 故郷の梅咲いて鉛筆走り書き 寝たきりの耳うぐいすの声を待ち 風邪ひいただけで厄年逃げておく 厄除けとつけば何んでも買う土産 守り札信じ厄年気にしない いたいと歌に秘めたる梅だより 川柳化粧櫓 聞けば心の花も咲く 植村客遊子報 富多葉 永秋

> あせらずに梅の便りを待つ二人 酒の人も含めて梅見酒 わかあゆ川柳会 小砂

内定へ金の工面を子は読まず 陽が落ちてこんぺい糖が光りだし 納得のいかぬ内定受け流 改修の護岸に芽ぶく猫柳 猫柳たわめられても根は曲げず メーターをずらしてストレスやり過し 猫柳から川ぶち春になり ストレスで起きてもおれず寝ておれず 内定を知らずにゴマをすり続け ストレスをたっぷり積んで里帰り ストレスを湯舟へ流すことにする ストレスに妙薬はなし眼を閉じる ある日ふとストレス無駄なものを買い 転勤の内定素振りさえ見せず ストレスに石ころしたたか蹴とばされ 西宮北口川柳会 杉浦婦美子報 美はるみ ヒデ子 白 鈴 芳 敝

思慕を絶つ女に揺れる花の影 簡単に捨てぬ女と駅に降り 結局は老母の意見が座をまとめ 啓蟄のサインに蛙目をこする 爆音は孤児の鳴咽を消して発ち 指切りの子と子に夕陽燃えている 分水嶺失意のままに逝った友 夜桜や亡母もわたしも朧なり ぬくい風歩幅を少し広くする 一つコケシの命目に入れる みつ子 いわゑ 近 伊

> 流し雛女の業に泣かされる デートする脳裏をよぎる父独 久しぶり夫とデートの服をよる おもはゆく老いて嵯峨野をデートする 老いた今過ぎしデートもなつかしく デートから今朝も戻らぬ猫の皿 球儀に旅の娘を追って見る 1)

ある芽生え朝の鏡が知ってい 三面鏡静かに開き忌が明ける 春風に少し優しくなる鏡 紙人形ケースの中で生きている 川柳ささやま

裏向きの家紋で包む慌てよっ 倖せな花咲かせたい貰い苗 補聴器の一人残して慌て出 子の育ち時々親をあわてさせ 老いの身のゆらぐ思いにふとあわて 安心と不安で送る子の門出 安心と失望絵馬にあるドラマ 手術後のガスに笑いと安心と

あれこれと植場にもめる苗が着き 移植して今日から苗は一人だち 苦労して覚えた踊り早や忘れ 苗育つ独りで伸びた貌をして アンワかけ話しはずんで用忘れ 忘れ物戻って貰ろたより嬉し りといて忘れがちとは得な人

年男今年限りの豆を撒き 今年も自信カーブの年男 回り若いと思う年男 東大阪川柳同好会

うなずいて自慢の聞ける齢になり

春愁の窓辺に近くレモン置く

斉藤三十四報 河原みのる報 ひか平 百合子 三笑子 千代子 みのる ゆう也 エキオ 道 かど 重

年男鬼の来ぬ間にひとねむ 王様が二人になってもめはじめ 生涯を妻トジ蓋で居てくれる 又一人蓋せず語る友が減り 年男厄除けだけの神まいり 結婚とローンが重い年 **童話から王様一日旅に出る** 王様の目に下々はうつらない 王様は年中胃散離さない 口に蓋できない儘に秘書は辞め

> 三十四 かずを 弥山人

度

色と欲はなれて背が冷えてくる 我が家とはあまりに違うドラマだな 順番を無視する毛虫に目をつむる 王様の嘘がまっすぐ通される

雅号ぶっちゃけばなし

ľ

日

俺も人間だと王様の血がさわぐ

湖鎮

屯

王様が乗る逃げ足の速い馬

柳宏子 雀踊子

その時の気分で物言ううすき顔

郎

新岡回天子報

商品は見るだけ目玉だけを買 人では何も出来ぬと知る職場 V

> 祇園から招きと付けが絵封筒 母からの手紙は封筒までぬくい 太陽と一緒に回る日なたぼこ 回れ右しても追いたい人の影

善人の涙が頼り視聴率

傷心の女の肩に触れたがる 同病同室同じ時間をもてあまし 重篤の亡父が好んだ冷し瓜 折りたたみ傘便利なようで不便物

良い看護痒い処に手が届き エンジンがちょいちょいとまる老朽車

次の日曜約束したが桜はもたぬよう 渓水報 回天子

川上

川柳しんぐう

久方の母を訪ねて回り道

切り回す腕良妻の見せどころ

回れ右させたい裸婦の絵がかかり

私が川柳を始めたのは確か昭和二十

それから二、三年経ち今は故人となられた田垣方大さ んが路郎師に口添えを戴き春日の号を称することにな 当初は「呆声」の号で川柳雑誌に投句していました。 203) 七年だったと思います。

付けの親であり師でもある路郎師を今更ながら偲んで 形である。 れる秀句を残して欲しい。目下のところ同名なし。 お藤は春の花として賞讃され、君の作品も世に賞讃さ りました。 藤井春日の上一字を除き下三字は二つに割り左右同 右せず左せず常に斯道に精進されたし。

in

作句を続けています。

命名は一家の多数決で決め 筆太に倖せいのる名を付ける 命名が無線で届く漁業基地 心眼を開くと自分が小さく見え 逆境で開いた道へもつ自信 春近し姿見開く娘に育つ 寿の包みを開く熱いお茶 封筒の親展妙に胸騒ぐ 封筒に辞表潜めて渡り合う 二面鏡開けば女の顔になる

登志代

道

男

嫁ぐ娘へ送る言葉は持たぬ父

武

松風報

お薬がすぐ効きそうなコマーシャル つぎお

木風

願いもよそに又キナくさくなる地球 メニューには僕のたべるものがない 鬼遊報 凡九郎

菜の花の海に埋もれて眠りたい

菜の花句会

釣銭をタバコに乗せて出す小窓 妻に先立たれし人の背丸し ライバルと勝手に決めて燃える夜 幸せの尺度を孫の数に見る 許されてから二人の長電話 三流のコース親父の道を継ぐ 妻が起き夫が寝つき春の風邪 仕事にも馴れてパートに持つ不満 てのひらの運命線をひた走る 在りし日の姿花見の席に見る 畳屋は三年老けた顔で来る 建前の祝詞木遣の歌ひびき 落ちるだけ落ちて限界かも知れず かんにんの限界忍耐ふるえてる 鬼退治まかすと校長祝辞述べ 三分の祝辞へ外す腕時計 お彼岸に若いまんまの顔の人 作業衣に折目ついてる清掃婦 幸運は素通りそんな生れ星 日曜日妻子の願い聞くとする ママさんの謎の微笑に通いつめ 菜の花ばたけを通ってくる債権者 メニューは妻にまかせてビール飲む 窓際で謎がわからぬふりをする いとはんとぼんちわかれる戎橋 露出過多謎の部分が狭くなる 雨がやんだらきっと行く動物園 特別のメニューに期待もり込まれ 謎ひめて舟を見つめるローレライ 造幣局のさくらは少し厚化粧 阿波訛り夕凪橋の風に消え 胃を半分切ってメニューに気を配る 学歴の割に願書は誤字混じり 謎解きが人よりおくれ鍬を持つ 菜の花が咲き首塚に蝶がくる その夜からノラの行方は謎のまま お願いと膝のあたりに手を置 菜の花に蝶 い事の多さに神も苦笑する 0 川柳ねやがわ 底にむかしの謎がある も庶民の顔 いて 博泉報 与呂志 シマ子 射月芳 美乙女 茂覚昭酔糸蕉鬼 然 雄坊子々葉露遊 不二夫 健 みつる 柳宏子 司

淳 朗

根をおろす妻はたっぷり脂肪つき ゴージャスなマンションペットと住む女 限界を悟り静かに眼を閉じる ママだってもう限界の遊園地 恒例の唯それだけで済む祝辞 春風へ踊る手振りの雪柳 次期選も目当てでたのまぬ祝辞する 限界を知れと足腰笑ってる 限界を越えた妥協へ妻無言 遺伝という限界があり蛙の子 輪の花の香りでたりる部屋

何日となく息子の背中ばかり見る

癖までも親そっくりの息子たち 一人息子蝶や花よの度が過ぎて

騙された筈の夜店の鉢が咲き 悠々自適鼻の回りへ浮く脂肪 あでやかな蕾仇花かも知れず 脂身を添えて霜降り包まれる めちぎる祝辞がいや味ともとれる

ある野心脂肪太りの男抱く

毒の針秘めて花束贈られる

賞

祝辞朗々頭の上を通り抜け

悪筆で黒く青春塗りつぶし

わだかまり酒でもつれて酒で解け 蕗の薹の方へ寝返りうつ蛙

JII

柳塔まつえ

叮紅報

柳宏子

帰巣本能忘れ息子がよりつかず 奴凧の糸が出稼ぎの空で切れ 糸つむぐ祖母を記憶の中で追う もつれ糸やさしくほぐす老婆心 糸切り歯女の意地を研いで待つ 添えば躾糸にも意地があり 与根一 寿美子 華

欲のない息子に親のじれっ

よしひろ 亜也子 あいき 覚然坊 てまり 歩かれるうちはと夫婦旅に出る 定退の補充ですます不況風 入社の日敬語をつかうのに疲れ 壁を塗る手先少しずつにぶり どの色を塗っても映えぬ年と知 五つ子が並んで歩くランドセル 熟年という人生の歩きぶり 車椅子歩くのぞみを失わず 出直しの心に明るい色を塗る 赤色に早く塗りたい北の島 穢れない日本海は青で塗る 親の欲ずっしり息子背負わされ 柳わかやま

列外を歩いて奇蹟試みる メルヘンを拾いにぶらり春の土堤 塗り潰す過去へ空しさだけ残 血と汗が実る人気の足のあと 人情にもろく底辺歩いてる 絶頂の人気の中にいる孤独 直線を歩いて女隊見せず

明日へ塗る夢の色撰るランドセル 野に下る男は地図を塗り変える 作られた人気に踊るピエロかも お先にどうぞ私ゆっくり歩きます 終盤戦人気だおれと見るあせり どん底の過去を持ってる人気者 秀才を尻目に悪童人気者 歌唱力なんてどうでもよい人気

三男報 和あき秀天忠凡九 分子むみ雄彦雄郎 紀久子 紀美女 佐代子 太茂津 孤呂二苗 芳 子 登美也 渓 叮逓 鳳由巡春 紅児哉吉 人郎歩梢童

バラ色に塗れる明日を信じてる 松葉杖今日奉納の礼詣り 完璧の意見だ反対してやろう 塗りこ 反対はせぬが安心しておれぬ 生き生きて尽きない業を持ち歩く 真直ぐに歩くと素直な風に逢う 佰浴衣着ればぞろぞろ歩き出す ゴキブリが歩いたらしい妻の声 の努力あって支えている人気 山長川柳会 めた汚点が心の座を占める 鎮彦報 登志代 克白緑勇武公 光 子子楼太雄子

春一番つくし芽ばえるわらべうた 暖冬に早起きをしたつくしんぼ 春雨におこされつくし立ちあがる 春を知り頭もたげた土筆かな 水平寺雪の庭にもつくしんぼ つくし見て奇声を上げた子供達

淀川で今年も背伸びした土筆

馬子唄に引かれてつくし顔を出し よろこびはつくしと並ぶランドセル 兄弟が今年も並ぶつくしんぼ なの花をそっと見ているつくしんほ 街の人土筆見たさに遠出する ランドセルつくしと会いに土手走る つくしにも似た人生の春はある つくしんぼずらりと並びおしあわせ つくしにもきびしく耐えた冬があり つくしんぼ先に取られて泣く子かな つくしんぼ大事にかこう新家庭 やよ 真寿恵 幸太郎 崎

幼なき日土筆の好きな友ありき 明日も又大きくなれよつくしんぼ

入園児ママと一緒に春を着て

せつ子 美代志 柳五郎

草

が

心

素

直

見

T

る

花

初孫の生命通うているぬくみ 初天神受験を絵馬にたくす春 叱ったらまっすぐ帰る二 初顔が何かのはずみでよくしゃべ まっすぐがどれか解らぬ時代に居 各停の我が町スーパー狙ってる まっすぐに生きたプライドだけ残 道草の罪軽くするつくしんぼ 日曜日家族そろってつくし摘 オーエスケー川柳会 三日 大坂 1) 形水報 鎮

まっすぐに帰り意外そうな顔 各停で土地の訛を聞きわける 神様を毎年変える初詣 拝殿は駅にまっすぐ続く道 空っぽのままで各停先に出る 各停で思わぬ人と乗り合せ ローカルの各停走る人を待ち

松よし

安 3/

男

老夫婦聞こえぬふりが堂に入り 夫婦円満秘訣を聞けば笑うの 金婚を目ざして手をとる夫婦旅 笑い声夫婦喧嘩に幕がおり 雑草のような夫婦で今日も活き 春ですね老妻そっと紅をひき 春冷えに土手のつくしも足踏みし 春雷の日に聞く僻地へ子の辞令 信じ合う夫婦無言の目がきれい **曇り後晴れを信じる夫婦仲** 春や春一秒刻みで咲く桜 供にも妬かれる程の夫婦仲 川柳後楽 2 井上

美佐子 百合子 秀 形 てまり 111

柳五郎報 人

佐加恵 健 しずこ

> 四季の釣り講釈どうり受け止 釣籠の軽さあんまりもの言わず 今日も又釣られた帰る空の魚籠 釣れた日は知らぬ人にも魚籠を見 だまし釣りされた女がだましてる 太公望釣れた日だけを鼻にかけ めず t 久米雄 栄胡敏 洋路

彦

釣天狗大魚と見せて店で買 我が家にも筍舟が着いた春 驚いて怒って泣いた終戦 警官の人形へもう驚かず 騰いた振りしてだます老いの知恵 ガンじゃないありませんよに驚かされ ヤミ手当驚くばかりの額となり

銅平

釣り上げたぼら橋上ではねている

トモエ

美佐保

佳 句 地 10 選 前月号から

人間 背を向けた人は追うまい冬木立 片道キッ しゃかの掌の上でいくさをくりひろげ 茶碗ふたつおいて夫婦に時差がある 足 合 坂 音 す は を 磁 が る 悲しきものよ愛を持つ 時 石はいつも北を 殺 女 プで背水の陣をしく 效 t とな ば 男 謎 振 0 0 4) 匂 板 向 玉 いする 尾 一手箱 指す か 岳 人選 孤呂 射月芳 多質子 重

洛酔報

そばにいて黙っているのも思いやり

史跡を訪えば花吹雪

日々求め自分に似合う役になり 家計簿の溜息今夜ももれてくる 与呂志 ひろ子

減税は玉虫色にして政治 友情が迷いを覚すアドバイス

ベレー帽ブレザーの赤ループタイ みつる 三十四 秀

気の弱い男へ美女のさそい水

白米が喰える時代に病気する

善人の嘘唇がすぐ乾く

歩男の責任靴が鳴る

抱き合って今日からはもう孤児でない 比呂志

そとえ

働き蜂すぐに上衣を脱ぎたがる 三十年機械になった宮仕え 機械には弱くてタバコばかり吸う みくびった機械に肩をたたかれる 機械化のストレス青い空を恋う 上衣もう脱ぎ捨てここが勝負どこ 磨作留 本蔭棒 重 道

川口 弘生報 テルミ 登志代 満津子

訪う家を教えてくれた沈丁花

城北川柳会

山神祭すめば田に行く耕耘機

チアガールの中の一人を忘られず 満開を見上げ見下ろす大阪城 あぜ道の花一輪に和まされ 叱られる覚悟を前に孫さとす 桜祭りも戻り寒

思いやりわかりながらの頑固者 さりげなく席をゆずって遠く立ち 踊り手へ舞台ではない花吹雪 そえられた手が温かい白い杖 カーテンを変えよと春の風が吹く

水門をあふれし水の花筏 ロボットが人間様になりすまし 銀行へ行く顔入れる顔に見え 今年また葉桜を見る忙しさ

郎遊

私の一言私にある甘え

深呼吸しても血圧引っかかり

悪友の毒舌にある思いやり 他人の飯食わすも一つの思いやり 母だろか旅行鞄の守り札 子を渓に落とすも獅子の思いやり 老夫婦どちらか合わしている歩幅

午新

郎郎郎

達

笑静

人生の終着駅で目がさめる

一周忌家族で汁粉父しのぶ甘党の割勘定は知れたもの 甘党の子でハンドルまかされる 甘党という恋人でもの足らず 甘党になって夫婦の茶がうまい 甘党の帰省の息子へ盛るおはぎ 甘党の女に憎い体重計

> 富久子 公

再会を絵にして桜散り止まず むらくも観桜川柳大会 明朗報

嫁がせてゆく日へ父の苦い酒

服のお茶がひきだす裏話

せき払い噂のひとが来た合図

お菓子には目がない父で頑固者 春呼ぶと思えば雨も苦にならず

はつ絵

大切な手紙ポストの音を聴き 核家族西瓜一つをもてあまし 七人の敵を生み出すランドセル 老母を待つバスは三台通り過ぎ 過去ばかり浮び出てくる沈丁花 退院へ干羽の鶴も羽ばたいて

> 肩の手が白くきれいな星明り 無人駅大きな荷物持って降 デートする電話明るい声がする 負け犬に見送りのない寒い駅 断ち切れぬ未練他人に覗かせぬ 先生が一服するとみな坐

すみれ

男対女の距離を噂する 梵鐘の響きに平和まだ残り カクテルのグラスに咲いた未練花 進学の未練が絶てぬ鍬を振 平和とは鳩がついばむ石畳 **順上の一服それから降り坂**

耕耘機 お早うを交して明るい朝となる 初対面噂の程の人でなし 問題を解きつつ人間老いてゆく プライドが問題という苦労性 仲人へ便り平和が溢れてる 妻の目が子の目が許す程の酒 問題児職員会議まだつづく 村も平和な春霞

真実に遠い噂を書きたてる 門灯を明るくつけて父を待つ シグナルがない人生の交差点 人 車交差点で身構える おめかしをすると明るい声となり 人はまた平和に飽きて剣を研ぐ ノラマのような都会の駅を見る

富百は福芳正 じ 子代め子子朗 峰亀きみえ 福芳正ゆ峰亀 子子朗子雪甲 代仕男 多賀子 紫泉之助 弘独早叮 登美也 酔朗仙苗紅江

人生の一服 定年からの夢 ダイヤルの指は未練のまま動く 娘らが来て明るい話題置いて去に 川竹 松風報

つぎお

にえきらぬ答へまたも押し切られ 涙してならない嫁ぐ日の鏡 色っぽくなる背信を知る鏡 招かれて仁一筋の過疎の医者 妻だけが知る人柄の裏おもて 近所で聴く人柄を疑わず 筋に生きて妥協を許さない 筋に生きて貧富の差が太い 筋の煙が延びる風の凪ぎ 一柄の父へのり気になってくる

> 萌野 風

多賀子

脱税が出来る世渡りしてみたい 献立の決まり包丁軽やかに 墓守る女なれども紅をひく 先生という名で世間には疎し 耐える事に馴れた女の座りダコ

松弘登春秀広康

正論もまるめ込まれる多数決

ほどほどの暮しで心満ち足りる **覚悟した顔が待ってる手術台** 討死を覚悟影武者武装する なるようになります妻のよい覚悟 浪は覚悟大きい夢綴る 岸和田川柳会

武助報 富志子 さよろ子 世界人 浪速子 白光子 希久志

満を持す主張

一気に堰を切り

テレビなど見る暇はない秒刻み 卒業式なみだはふかぬことにする 耳やんで自分の声がこだまする

中三愛

小六紀 小四仁昭

本当は嬉しいけれど口にせず

貧しいが米櫃の米満ちている 新社員希望に満ちた顔並ぶ

貧乏は覚悟してます恋進む

満たされぬ思いに迷う水中花 満ち足りた心の隅にある不安 信念の男に潮が満ちてくる

明和文

朗

不況とや社長は趣味の釣りゴルフ
西村 耐えること馴れと世代の合い言 野良大の中にも居るぞ肥満体 人間が甘いと義歯もあまくなる 割箸はいいなうどんが滑らない 肩書きにほれて娘をやると決め 親切なお方と知った乞食の掌 疑えば曲り角だけ見えてくる 酒の量心配されて酔うている 葉

ちからモリモリげんきでがんばるぞ まだ来ない不安小雨の離れの間 好転を信じて心の火を消さず スタンドに男がうたう負けいくさ 花ひらくときにはしない嫁いびり 柳たけはら

鈍行にしよう終着駅が見え 巣立つ子を離したくない口喧嘩 嫁がせて独り故郷の虹を見る 仕送りが不足で女つんとする やり切れぬ思いを海へ来て叫ぶ 雑踏へ今日の意欲が流れこむ 悪友が忘れず誘う走り書

与根一

寿美子

ばあちゃんが作った大学いもおいし 小二亜貴子 菁居報 六歲方昭 緑之助

早苗報 射月芳 登美也 # 朗仙

旬の味二級酒酌んで満ち足りる 橋渡る振り向く灯もない風の 次の世に望んで過去をもう追わぬ 中国孤児の涙いくさは続いてる お日さまの匂いが好きで布団干す 今日までの名刺の灰が風に舞う ジョークまたジョーク冴えてる日なりけり 沈思黙考知恵の泉をさがさねば 春の夜や昔むかしを聞きたがり 曲り角いくつ曲った四十年 栗ひとつくべて女が隙を見す 何処からも苦情がこない馬鹿ばなし 一年中いちごを食べている不幸 一番出世のおごりが恐い男坂 中

一節蘭鈍 比呂子 笑菁 シゲョ



募 集・

悪

支

傍

島

静

馬

内

高 111 本

薰

風

選 選 選

やり ★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。 字は楷書で新かなづかいにしてください 水 手 吉 H H 次 笑

文 選 選 選

JII 題 染 煙 柳 吟 帖 抄 塔 (各題5句以 3句 10句 10 旬 橘 黒 若

八 月号発表 6月 15

締切

3

久志

JII

柳

愛 課 水 ★用紙はなるべく柳箋をご使用ください ★川柳塔欄の投句 ボタン 调 窓 題 染 煙 末 吟 帖 抄 (3句 (各題5句以内 は本社同 橘 1: 岐 原 高 人に限ります 1 吸 薫 7 子 江 風 選 選 選

九月号発表 塔 10 10句) 黒 若 (7月15 Ш 本 多 締切 ク久志

> 選 選 選

6月の常任理事会は1日5時から

₹545

大阪市阿倍野区三明町二一一〇二

藤

L 太

社郎

昭昭 和和 Ti. Ti.

4 定 年分 印発編 十七年 刷行集 所人兼 六 Ξ $\overline{\mathcal{H}}$ 千 中 六五 百 = 月月 円 原島 百 百 送料45 童 逢 円円 - 五日印刷

一送料共 送料共

ウエムラ第2ビル202号室 振替口座大阪・三三三六八番 柳 九 四番 社

発行所

111

出会い 6月句会 白岩文衛 出版記念

会席 費題

五百円題

当日発表

各題三句以内厳守

出会い 幸

13

題

おはなし 先 風

会 日 場時 金六

月 七 地下鉄堺筋線上南区鰻谷市 電 会 日 月

後

六時

橘 若板 É 尾 高

> 選 選栞

271 西 尾

長堀 東 3 9 町 文 3 車 10 衛 東ス 5 番

番 7 地

★投句は柳箋に一葉一題、 同封のこと。

> 柳 111

薫 潮 岳

風 花 人

選

塔

社

*

П

Ŧi.

百

タテ3.3

cm

× 展望

ヨコ

2.5

cm

誌

5

段

段(柳

界

段 大

表 彰 道 標 7月の兼題 る 外」

本社7月句会は7日(水) 会場・なにわ会館(詳細表紙裏)

> 分 本

Ħ. 組 円

百 0)

★原 稿 d 切

申込みは 〒83八尾市中田二―三〇二高杉鬼遊 か T は 6 月25日 円です。

川柳塔社会計室

暑中広告受付!

肉体疲労時のVB·補給に

乳刷のビタミンBi補給、神経痛・腰痛・筋肉痛・ 屑こりの緩和、脚気。☆説明書をよく読んで 正しくお使いください。☆くわしくは医師、 薬剤師、薬局、薬店にご相談ください。

武田薬品工業株式会社 〒541 大阪市東区道修町2-27

夫婦 も晴天なり」では、 だろうか?」の中に、 ようだ。たとえば、 玩具の好きな方が わゆる裏方さん(小道具係 の人々は、あ 夫の実家(松江とい に帰ると、 シーンがあ . 亀の凧を二 れで、やは 居られる を二人に松江地 った。 本日 郷土 錦板玉垣 雪の肌、 これで てあり、 十九獅子等はピンク系統で 通り 玉垣、揚柳の笛、美人競、 to. 個性があり、 白とんぼ、 色かたち花それぞ しく紫の花で、 大力無双、

責任感やこれからの使命感満足感よりも、それに伴う ーブスの山田久志投手が 自号発行と時を同じくした ルを観客席に投げた 心遂げた ウイニン 出席のため 名で宮本 で涯の行を 7 から 州大原 自身は、 かしい言葉を引かれた。 合柳魂とか柳思というなつ 身についた川 50 柳恩や柳縁は人一倍、柳魂など信用しな 連 氏がお話を と強調さ れになるような形 いた。 祉 川柳二生 れる。 本作 私 ▼八尾 ある。 かかす 表に出てはい は調 んに相当する。 理師というところか 集者もまたこ のせてあった。さりげ 城の郷土玩具・堤土人 のである。 視聴者の 桃林堂 けないようで 料理で 茶館 印象を

裏方

グボー

から大記録を成

勝を達成した。

月二十九日、 号を発送

を見てとった。

柳塔

で感慨深く見詰めた。

NH

Kの朝のテ

有難く感じている。

「本日も晴天なり」も終り ビ小説 がある。 桜を咲き 鉢にはそれぞれ名札が挿し 十数点であったが、さくららった。目的の絵と書は二 きと鉢 草の鉢植が百点ほど展示さ 書家・榊英山氏 咲きにけり、一茶の句いた。 "わが国は草も の子展 あったことを知る。 看板の鉢の子展が を観せても 奉山白 C.

マの製作者のグループ、 る。ところで、NHKドラ 目下「ハイカラさん」であ

の明日を思っていた。 性が百花と咲き競う川柳田いのでメモをしながら、畑

柳界

個

私でも見溺れた。名が面白

意味 てごらんなさい/音を消し 代りに目を閉じてテレビを天の邪鬼なぼくは音を消す 先日も がいてくもっ い発見をすることがある。れはこれで、なかなか面白 いべで始まる中桐 てテレビを見てごらんなさ * が聞いて、みた。すると、こ "嘘だと思うなら、 れで、 と題する詩を読 なかなかっ 雅夫 んで 0

七賢人、

可憐だ。 吹雪笠は名

買 を結ぶ



台詞。どんな役でも台詞ま わしが一様に聞こえ、極端 に云えば春団治もうどん屋 いのだ。ひょっとして彼は 途方もない大根役者ではな いのか。やはりテレビは目 を開けてみると、これが大 ★この実 と甘い女の声にスワ!と目 松竹新喜劇 の乱れようがよく分る。 お姫さま。 、験で気になったの の藤山寛美 時代劇 の台

JII

塔



